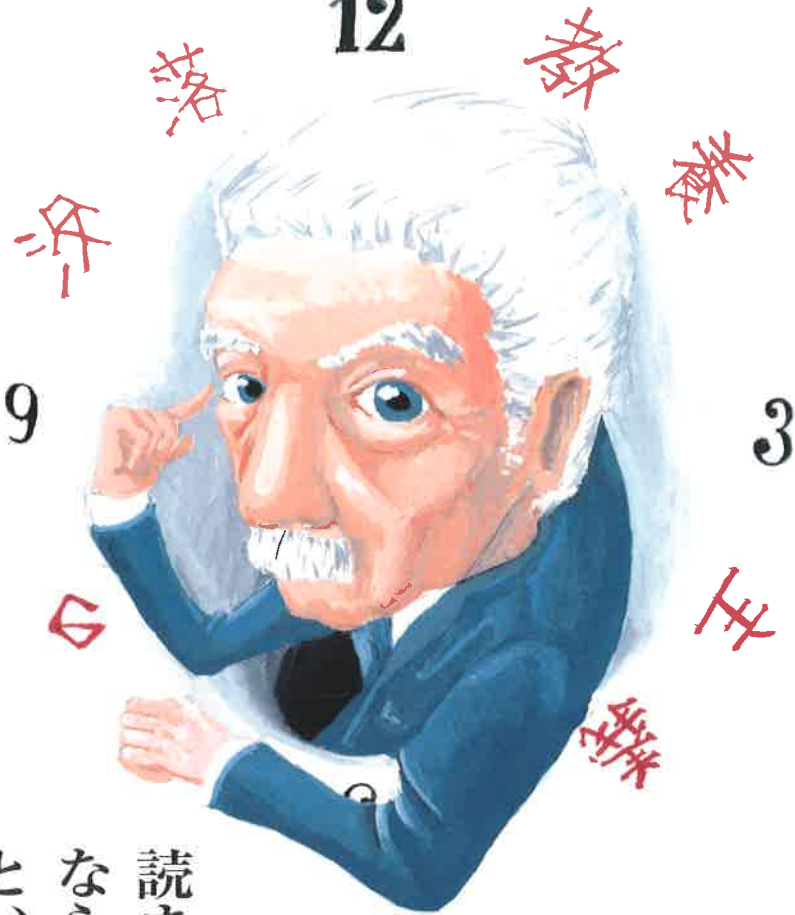


第121号 書評

12



読まなければ
ならない本、
というものが
あった……

本のいろいろ⑧ 関大図書館―紙の続き―

仲井 徳

絵入り本について進めていこう。前回に続いて「紙」である。

言葉を文字により記録し、保存することが始まった今から約五〇〇〇年前より、文字は石、骨、木、竹、棕櫚の葉、粘土板としてパピルス等に刻まれるか書写された。書写材料としての紙の発明は今から約二二〇〇年前のことである。紙から本が出来たことを考えると、知識を保存・伝達する手段としての本を構成する紙のことをいくら強調しても足りないと思う。紙こそ人間文化の基礎材料だからである。

もともと、電子革命の現在では本の存在を危ぶむ声が聞こえて来るのだが、私にはそう簡単に本の使命が尽きるとは思えないのである。

さて、『紙漉重宝記』一冊の紹介である。

国東治兵衛選 寛政十(一七九八)年の刊行。毎頁に大きく図解入りで和紙の製法(楮を使つた漉だめ技法)を要領よく説明してある。

〔C/585.6/K1/1〕〔複製E/585/Ku432/1〕

遣唐使の貢物として紙が用いられたほど、和紙は良品であったし、その製紙法は秘伝であった。七五一年に唐とサラセンがタラス河で戦い、

唐軍が敗れた時に捕虜の中いた製紙職人によって製紙法が西伝したとされるが、ヨーロッパへは十二世紀になってやっと製紙工場が出来た。シルクロードにおける絹の製法伝授にも厳しい制限があったのと同じである。

江戸時代の幕藩制度のもとでは、多くの紙は諸藩の専売品であった。

そんな時代に、石見(島根県)の紙問屋・国東治兵衛は本書を公刊したのである。より多くの農民に教えて、石見の殖産興業を図る目的があったと考えられる。

この本の挿絵は丹羽桃溪が描いているが、彼は大坂の絵師で『撰津名所図会』『河内名所図会』等の挿絵も手がけた人である。いずれまた詳説したい。

和紙については、次の文献を参照してください。
『和紙文化史』 久米康生著 一九九〇年

『和漢紙之文献類聚』 二冊 関義城著

一九七四・七六年 [E/585/Se242/3-1/2]

(神戸女子大学教員・元関西大学図書館員)



ひとり、教養について考える	齊藤 寛信	4
山桜の蔭に	木村 愚門	8
韓国の大学における「教養主義」	李 正 熙	14
夜学の源流を探り、「夜学ぶ」意義を見出す	田中 欣和	17
夜学の歴史性と魅力	上田 利男	21
ロンドン便り 先日どろぼうに遭いました	マイルズ純子	25
謎のポートルイト	河盛 紗弥	30
「非行少年へのまなざし」	富山 悟志	32
バートン版「カーマ・ストラ」		34

連 載

本のいろいろ	⑧紙の続き	⑨百科事典	仲井 徳	表2
	⑩名所記	⑪阿修羅帖		44
図像で読み解く魔女の世界	(一)		浜本 隆志	36
とりとめのない備忘録	(二)		田中 佳吾	46
	(三)			
幽芳の掘り出し本	(二)			
近代日本文学史を考える	(三)		吉田 永宏	54
文芸編集者の回想を手がかりに				

小 説

モノフォビア	林田ふくみ	73
編集後記		86

ひとり、教養について考える

斉藤寛信

学部生だったころ、ある先生が「大学に入って、指導教授から最初に「学生が読むべき百冊の本」というプリントを手渡された。これを見て私は「先生、四年間にこれだけよむのですか」「何を言ってるんだ、二年間で読むんだ」——むろん私は、キチンと読みましたよ。その「百冊の本を。」と講義の中でおっしゃっていたのを思い出した。二年間というのは、もちろん教養課程のことである。教養課程ということば、そしてカリキュラムは、今もなお存在している。

私が過ごした教養課程—そういう名前であったか—という二年間は、どんなものであったか。専攻しようとする歴史以外に、論理学、政治学、生物学、自然科学史、

フランス語、民族学というものを単位修得のために、自らの意志で「強制的」に受講し、はじめに講義へ出席していた気がする。そしてレポートや試験のために、講義に関係のある書籍を読んでいた気がする。そのせいで単位は無事に修得できていた。

「気がする」と書いたのは、今となってはその時の内容(講義内容や読んだ本の内容)がほとんど私の記憶から抜け落ちていくからだ。

教養課程が終わり、専門課程に入った四回生のとき、ある先生が講義のなかで「富士山は何故高いのか、知っているか」とその場にいた学生たちに質問された。私は「富士山は日本一高いと言われているから」と幼稚な答

えをしたのだが、その先生は「それは、裾野が広いからだ。学問に置き換えて、研究の頂点に達するために土台、裾野がしっかりしておかなければいけない。歴史だけ勉強しているのではなく、社会学などあらゆる学問をしておかなければいけないのだ」と、学生一同におっしゃられた。教養を身につけるべき、という意味であろう。感慨深いことばである。

果たして私には、いや、学生生活を謳歌する同年代の人びとに「教養」なるものが須く備わっているのであるうか。教養とはいかなるものか。

昨年、竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』（二〇〇三年七月、中公新書）が上梓された。この本は、新聞書評欄や著者インタビューで取りあげられ、話題の本となった。私が手にしたものは、四度も版を重ねたものだ。

一九七〇年代まで日本の大学、大学生を支配した教養主義は、今や魅力を失ってしまった。著者はなぜこのようになってしまったのか、そして教養主義とはいかなるものであったのかを「教養主義への鎮魂曲」（二十六ページ）として、論じている。

教養主義とは、「哲学・歴史・文学など人文学の読書を中心にした人格の完成を目指す態度」（四十ページ）

で、大正時代の旧制高等学校を主として定着していった。また、旧制高校は教養主義の本堂で、帝大文学部（帝国大学・今の国立大学）はその奥の院であった。しかも、文学部の卒業生の多くは学校の教師として活躍する。これは、教養主義の再生産へとつながってゆく。この指摘は非常に面白い。

しかし、教養主義はマルクス主義へと変化し始めた。

しかも、これが培養されたのが、大学までのモラトリアム期にあつた高等学校であつた。第二次世界大戦後の大学で学生運動が活発におこなわれたのも、モラトリアムにあつた教養課程の学生たちの間であつたことと似ている。読書による教養を身につけている時期に、マルクス主義と接触して左傾化していった。教養主義の根っこにある人格主義（人格の完成を目指す）が左傾化と連続している、と著者は指摘する。旧制高等学校が解体され、新しい学制が敷かれた一九五〇年代の大学キャンパスに教養主義は存在した。そして、マルクス主義も席卷していた。大卒を採用する企業はあからさまに、過剰なほど赤化学生を警戒した。同時に当時の若者に蔓延していた、結核も警戒していた。やがて、「マルクス主義罹患者」は就職というかたちで転向してゆく。

私たちは、岩波文庫や岩波新書というブランドに何か

しらの信用と信頼を持つている。また、キャンパスに教養主義が存在していたころ、多くの学生が岩波文庫の背表紙にある星の数を見て、何を讀もうかと書店の棚の前で思索したと聞く。それはいったいなぜなのか。第四章「岩波書店という文化装置」はそれを解く鍵となっている。

岩波書店は古書店からスタートしている。出版業として出発するのは、夏目漱石『こころ』の自費出版による。やがて哲学書を出版し、「哲学書の岩波書店」というブランドを確立し、岩波文庫・新書の出版へと進んでゆく。このようにして、岩波書店は「教養主義の文化エージェント」（一四二ページ）として確立した。著者によると、岩波書店の成功には社長である岩波茂雄の学歴が大きく関係しているという。

また、岩波書店は翻訳書を数多く出版し、東京帝大教授や京都帝大教授の著作を出版することでその正統性を賦与され、逆に著作者はみずからの正統性を証明するために、岩波書店での書籍刊行をおこなった。このもちつもたれつの関係が、岩波ブランドへの信用を形成したのである。

さきほど、教養主義の奥の院は帝大文学部であると書いた。帝大文学部は、比較的貧しい農村部出身者が多か

った。教養主義は農村の刻苦勤勉的エートスによって支えられていた。それゆえ、読書を中心にした人格の完成を目指す方向に進んだ。また、農村の若者が高等教育に進学して、高級な学問や知識の持ち主となるだけでなく、垢抜けた洋風生活人となることを志向した。そのため、翻訳書を出版する岩波書店に信頼を置くのである。

しかし農村という教養主義を支えた地盤が、都市型生活様式の浸透によって崩れ始める。決定的なものとなったのは、一九七〇年代後半以降の「新中間大衆社会」の登場によるものであった。

教養よりも現代の若者が身につけておかねばならないのは、パソコンが扱える、英語が話せる、といった何かしらの資格（英語であれば、TOEICのような）をとることができる技能であろう。それは、就職に有利とすることを意識しているのだろう。教養主義が没落し始めたころ、大学への進学率は増加し、大学を卒業したサラリーマンが特別の存在として扱われなくなった。企業にとつては、社員となるべき学生が大学で身につけた教養や専門知識は邪魔な存在となった。就職先で必要な技能のみが要求される。そのために、資格が必要となるのである。それさえあれば、大卒サラリーマンのなかでも自分が特別な存在となりうる。教養を身につけるべき学生



がそうした要求に応じるために、教養を捨てたとも考えられることができる。私は本書を読み終えてそう考えた。教養とはいかなるものか、と冒頭で書いたが、今の若者に「少なくとも、この本は読んでおかねばならない」「読んでおいたほうがよい本」というものがない。読書によって、教養を身につける素地がないのである。読むべき・読んでおいたほうがよいものがあるとすれば、マングであったり、ファッション雑誌であろう。本と限定すれば話題の新刊書ぐらいなもので、それがロング・セラーとなることはまずあるまい。すぐに消えてゆくのである。教養主義が存在した時代に広く読まれた『世界』『中央公論』などの総合雑誌さえ、目を通そうとしない。

総合図書館に置かれている、総合雑誌の状態を見よ。とまれ、何様のつもりで書いたのか。かく言う私も、教養主義が存在した時代ならば読んでおかねばならない本や読んでおいたほうが良い本をほとんど手にしていない。あちこちで諸先輩方と接するにつれ、ひしひしと読書による教養を身につけなければ、と感じるのである。だからこそ、書店の岩波文庫や新書の棚に置かれている本を何冊も買う。しかし、私の本棚にはそうした本が何冊も置かれたままとなっている。「いつか読まねば」そう思いつつ、じつくりと読む時間を取れないままである。言い訳にしか過ぎないのだが。

(ざいとうひろのぶ・大学院生)

「教養主義の没落」変りゆく
エリート学生文化」

竹内 洋 著

中公新書（本体七八〇円）

二〇〇三年七月刊

山桜の蔭に

木村 愚門

人殺しは病気か？

少年Aについて、事件直後に学生にたずねたことがあった。「少年Aはおぞましい！と思う人は？」大教室で二百人ぐらいいただろうか、うち七、八人がおそろのおそろの手を挙げた。つぎに「かわいそう！と思う人は？」と訊いたら、今度は倍ぐらいの学生が手を挙げた。遊んでくれると思つてついでにきた発達障害の子を絞め殺し、首を切り落しながら射精した一四歳の少年を「おぞましい化け物」と思うよりは、「かわいそうな病気」と思う学生の方が多かつたのである。池田の小学校で幼い子どもたちを何人も刺し殺した宅間守は、「メチャクチャに人

を殺せば、元妻も自分と知り合つたことを後悔し、世間の人々も最愛の家族、友人を失い、自分と同様に絶望的な苦しみを味わうはずだ。もうやるしかない。」と思つたらしい。

しかし、それにしても「人殺し」は果たして「病気」なのだろうか。自分がみじめで不幸なのは社会のせいなのだろうか？僕たちが生きにくいのは、政治が悪いから、体制が間違つているからなのだろうか。そのむかし、「抑圧的寛容」(H・マルクーゼ)とか「人間疎外」(K・マルクス)とかが流行つた時代があつた。資本主義体制のもとでは人間は「抑圧」され、自己を譲り渡し(「人間疎外」)、他者とともに幸福であることができない、

という物語である。

それをともに信じ込んで貨幣を廃止し都市を破壊し階級敵を殲滅したとおぼしいカンボジアのポルポト政権は、自国民七五〇万のうち二〇〇万人を田んぼのほとりや野山のくぼみで撲殺した、骸骨が累々と横たわるその写真を最初に日本におくった写真家の大石芳野さんが、日本を代表する新聞に「嘘つき」呼ばわりされたのはついこの間である。「優しいアジアの顔」をした社会主義者ポルポトは、仲間を殺しすぎたあげくだれも信じられなくなつて、自分のベッドの周囲にぐるっと地雷を埋めて寝たという。夜中に小用に立つために地雷を埋めずにおいた一カ所は護衛の兵士にも教えなかつたらしい。かと思うと、日本のある過激派セクトは、神戸連続殺傷事件を「国家権力の陰謀」と公言してはばからなかつた。社会学会でその陰謀説を公然と発表する研究者もいたほどである。

人民のために

その昔「労働者人民のために」いさぎよく青春をささげたわが友人と、三〇年ぶりに会う機会がこの春あった。いまは「芦屋の社長」をしてベンツを乗り回している彼は「それでもな」、「資本の論理」は貫徹しているよな

「、なあキムラー！」とブツシュの対テロ戦争に憤慨していた。そしてちなみに、(週刊誌情報によれば)あの宅間守の父が、肝いりの日本社会党員で土井たか子の大ファンであった、ということも驚くに値する。

ついでにもうひとつ。サリンを醤油瓶につめてニューヨークの地下鉄に撒こうとしたあのオウム真理教が機動隊によつて包囲され、第七サティアンの巨大なシヴァ神のパネルの奥から、サリンを六〇トン生産するはずの毒ガスプラントが出てきたときのことである。教授会で隣に座つた若手学者のひとりに「すごいのがでてきたね」と語りかけたら、「木村先生、なに言っているんですか、あれは権力の陰謀ですよ！」と一蹴されたのであった。もし万一最初のサリンが、松本の裁判官宿舍のそばではなく、自衛隊の「化学防護隊」(七三一部隊の生き残りらしい)の「塀の外」で撒かれたとしたら、オウムの「最終戦争」は実現していた可能性がある。「自衛隊と米軍が攻めてくる」という麻原の予言に騙されて、ほくらの世代は、助けに來た自衛隊に石を投げていたにちがいない。「反権力」は正義である、と信じて疑わなかつた多くの日本人と日本の国を救つたのは、詐欺罪を言い渡した裁判官に対する麻原の恨みと執念深さであつた、と言える。

底辺から

いま地球規模で展開されつつある「文明対テロリズム」の戦端を開いたのは、安全と、水と、富にめぐまれたこの長寿国日本に生まれたカルト集団であったことを忘れてはならない。彼らをテロへと走らせたものは、飢えでも恐怖政治でもなかったのである。宣戦布告なしに、一般都市住民に無差別大量殺戮毒ガス兵器をつかう、という禁じ手を使って「反文明テロ」を人類史上初めてやってのけたこの一派は、今もそこ、吹田駅の近くのビルの中で「修行」をつづけているという話だ。

三〇数年前、ぼくが東北の片田舎からひとり京都に出てきたのは、人間についてしっかり考えたいと思ったからだった。心理学も哲学もおもしろくなかった（その当時は！）ので、何でもできる（いいかげんなという意味ではない！）「社会学」を選んだのである。大学に入って考えたことは、世界を理解するにはまず「底辺から」見なければ、ということだった。そう思いながらキャンパスをうるついでいたら、見事に「底辺問題研究会」というサークルの看板にぶつかつたのである。人並みにマルクスを読み、反戦デモをし、抑圧された人々の側に立つて「闘う」つもりになつたのは、当時の標準的な倫理

感（と残念ながら標準的知性）をもつ田舎者学生であつたことの証である。

さて、諸君。この五月の虚しさは何だ？ぼくらひとりひとりがそれぞれに苦しく、それなりに不幸なのは、果たしてこの社会のせいなのか？政治家がバカだから、僕たちの生は空しく虚ろなのか？人間が人間らしく生きられないのは、資本主義体制が間違っているから、というのは本当か？

地上の楽園

若き大学院生だつたマーガレット・ミードがサモア諸島に渡つて島民に聞き取り調査をし、「この南洋の島には抑圧も暴力もない。少年少女が婚前交渉を楽しみながら自由にのびのびと育つやさしい社会がある！」という地上の楽園レポート（『サモアの思春期』）を書いてボアズ教授に提出したのは一九二七年である。この本は一躍ベストセラーとなり、社会を変えれば人間も変わる、という希望と理想主義を「人類学的事実」の名において世界中にばらまいた。しかしである。相撲取りの強さを見れば、サモア人が大の喧嘩好きであることは大方の日本人には見当がつくが、『サモアの思春期』は、ろくに現地語も話せずに教会のベランダでエッチな調査をはじめ

た白人の女学生ミードを、サモアのお茶目な少女たちがからかって担いだのだ!という驚くべき(関係者ならだれでも知っている、しかし言つてはならない)「真実」が暴露されたのは、それから半世紀以上たった一九八三年このこと(D・フリーマン『マーガレット・ミードとサモア』みすず書房)であつた。社会を「変革」すると人間は「自由」で「幸福」になる!という二〇世紀の「解放神話」のバイブルとなつたこの人類学の古典は、サモアの少女たちのお茶目な悪戯に誑かされた白人の理想主義者が書いた「真つ赤な嘘」の物語だったのである。

プロバラ

いま日本はふたつのウイルスに冒されて死にかけている。ひとつは「プロバラ」、もうひとつは「コロアカ」というウイルスである。プロバラ・ウイルスの組成から説明しよう。このウイルスは、いたるところに蔓延しているのですがどこでもお目にかかることができる。宅間守や佐賀のバスジャック犯はこのウイルスに冒されて脳をやられたのである。プロバラはプロとバラの合成語で、ワープロのようなものだ。プロはプロテストイング(Protesting)のプロ、バラはパラサイト(Parasites)のパラである。つまり、このプロバラ・ウイルスに感染

すると、抗議することによって寄生する人間、文句を言いながら相手からせびりとする「寄生動物」に退化する。

生徒は先生にたかつてプロバラとなり、子どもはあばれて親のプロバラとなる。労働組合はストライキの脅しで会社にプロバラし、教師も組合をつくつて国や法人にプロバラする。なんでも「絶対反対!」を唱えて審議を引き延ばしてばかりいたかつて野党は、このプロバラ精神の権化であつた。日本全国津々浦々まで大小のプロバラのモザイク入れ子で満たされてしまった結果、この国はもはやだれも自分の足で立てない国になってしまった。おまけに、その日本に寄生するパラサイトが北の隣国、かつて「地上の楽園」と夢にまで見られた社会主義の国家であるとは、驚きをとおりこしてただ呆れるばかりである。

この「歴史の運命」は、田舎から出てきた煩悶青年の知性では予見も推測もできなかったことを告白するしかない。弱者の立場に立つて強者を撓め、人類を貧困と抑圧から解放するはずの社会主義ヒューマニズムが、卑しい「欲望」までも聖なる「人權」として祭り上げ、「要求実現」を叫んで「抗議行動」に明け暮れた結果、いまや糾弾と略奪のイデオロギーに転化してしまい、嫌がらせとモノ盗りを生業とする卑しいプロバラに格好の口実

をあたえる意味遺伝子（Semigene）と化してしまつたのだ。富める国日本に対する隣国の糾弾と謝罪（と援助）要求は、この腐敗した社会主義イデオロギーの国家的発現形態であることに気づくべきである。

コロアカ

さてもうひとつのウィルス、コロアカが残っている。

コロアカはコロニアル（Colonial）のコロ、アカはアカデミズム（Academism）のアカである。このコロアカ・ウィルスに冒されると、外の国を崇めて自国を恥じ、自分たちの祖先を罵るようになる。代表が「西欧近代」を崇めた「近代主義者」で、その総代格が故丸山真男である。ちなみに、六〇年代に訪米した丸山が、講演のあと芝生で彼を囲んだ日本の留学生たちになぜか英語でしゃべっていた、というおもしろい目撃体験談が竹内洋氏の近作で紹介されている。それはともあれ、平和と民主主義のために、近代主義者は声をそろえてこの美しい日本を「前近代」だ、「封建遺制」だ、「ウルトラナショナリズム」だ、と罵り倒したのであった。

最後にもっとも強力なコロアカ・ウィルスの変種についてふれなければならない。その名も「マルクス主義」という。モスクワや北京を宗主国と仰ぐこの被植民地主

義者のコロアカは、呪うべき天皇制のもとでアジア的停滞をひきずるこの日本国に「共産主義革命」を引き起こして、「各人が万人のために万人が各人のために」生きる「真の人類史」を切り開こうと誠実に志したのである。いま「拉致」だ「核」だと騒いでいる北東アジアでは、単なるプロバラと化してしまつたこのマルクス主義コロアカ精神の歴史的清算がまさに愁眉の急となっているのだ。

プロバラは、旧体制の権威を打破して日本的悪徳を美德ごと解体するのに力があつた。コロアカは、西欧近代の学問や文明を移入して素直に自省し、ついでに自虐するの役にだつた。そして実は、戦後の「大学」はコロアカが大まじめにプロバラを育てる文化的装置だつた（＝として機能した）のである。すでに日本のプロテストタンが歴史的役割を終えて久しい今、大学はレジヤランどこころかパラサイト天国と化したかの観がある、といえば言いすぎだろうか。私たち教員、とくに、若気の至りとは言え、かつてそれなりの志をもって弱者の側に立ち、強き者・持てる者を糺そうと志した元サヨクの教員は、みずからの姿を鏡に映して直視すべきである。にわかグルメとなつて糖尿を患つたり生半可なワイン談義にふけつたりしている場合ではない。五年後には定年延長

もたぶん終わる。本体が倒れるときはパラサイトも倒れる。この駄文を読んでくれる二〇歳の若者に、この私はいったい何を手渡すことができるのか？

呪われた折り

確かに、「否定」はのり超えるために必要である。しかし「否定の否定」を目指した歴史的冒険は「肯定」を生み出すことができなかつた。かつて「弁証法」とよばれて一世を風靡したこのいかさまロジックに誑かされてはならない。否定の否定は、呪われた折りへと転落する危険な斜面の上で燃える怪しいカンテラにすぎない。東京にサリンを撒いても、ニューヨークに炭疽菌を吹きかけても、世界中に核爆弾を打ち込んで、否定の否定は肯定にはならない。この否定の否定こそが、ポルポトの「呪われた荒野」の母であつた、と社会学者である僕は考察する。プロバラでも、コロアカでもいい、そろそろ否定の夢と自虐の偽善から目覚めて、自前のものをつくりあげなければ、この国は（おそらくこの大学も）本当に危ない。それぞれの志への敬意のもとに、もてる力を結集すべきときが来たのだ。

母のみもとに

ちょうど五九年前の春のことである。この関西大学から沖繩近海へ特攻に翔びたつたひとりの学友がいた。

いざさらば 我は御国の山桜

母のみもとに 帰り咲かなむ

母と最期の一夜を語り明かした朝、緒方襄が残していった歌である。息子襄に届くことのなかつた母の返歌は次のようである。

散る花の いざぎよきは愛でつつも

母のこころは 悲しかりけり

この春、はくはせめて、裏山に咲く一本の山桜の古木に酒を捧げよう、とおもう。

（きむら ぐもん・社会学部教授）

韓国の大学における「教養主義」

李 正 熙

竹内洋の「教養主義の没落」という本を読んだ。日本の大学のエリート文化が「教養主義」という形でいかに形成され、それが日本社会にいかなる影響を与えたかを見事に描き、参考にするところが多かった。特に、韓国の大学文化と「教養主義」を考えるよい機会を与えてくれた。

著者は戦前旧制高校と帝大の文学部が教養主義の種をまいて、それが戦後まで引き継がれたと分析している。韓国の場合は、日本の植民地下におかれ、京城帝国大学（今のソウル大学）があったとはいえ、その教員と学生は少なく、しかも日本人が中心となっていて、日本のような教養主義の種まきはされなかっただろう。

敗戦後、日本の大学はマルクス主義との接触と激しい学生運動の中で戦前の教養主義の伝統を受け継いでいく。GHQがレッドパージを断行するなど共産主義者を弾圧したが、マルクス主義に対する思想の自由は与えられた。しかし、韓国は、解放後、南北分断と朝鮮戦争によってマルクス主義関係の書物が禁止されたばかりでなく、それに対する学問上の議論さえ厳しく制限された。マルクス主義をうんぬんする人は「親北朝鮮勢力」として見なされ、牢に入れられた。すなわち、マルクス主義に対する思想の自由は一切許されなかったのだ。

このような厳しい環境は、韓国の大学が人格形成や社会改良のための「教養主義」を形成するにあたって、マ

イナスに働いただろう。マルクス主義が禁止されていても「教養主義」が芽生えないことはない。しかし、一九六〇年代における日本の安保闘争とベトナム反戦デモで見られるように、その運動を導いた大学生と知識人はマルクス主義と「教養主義」の武器を手に、社会の不条理と闘ったことを思い出せば、マルクス主義と「教養主義」とは相関関係にあると考えられる。

韓国の大学がその呪縛から解放されたのは一九八〇年代に入ってからである。一九八七年、私は大学に入学した。当時のキャンパスは殺風景だった。至る所に反政府スローガンの垂れ幕がかかっていた。大学の建物と図書館の壁は独裁政権に対して批判的に書いた壁新聞が貼ってあった。キャンパスは警察が学生デモ隊に発射した催涙弾の破片が所々に散らばっていて、涙と鼻水を出さずにはその近くを通れなかった。

大学は社会と隔離された自由な空間であった。先輩に勧められ、読み始めたマルクス主義関係の書物に導かれ、少しずつ社会の不条理を自覚し、ついにデモ隊に参加するようになった。独裁政権を倒して、労働者と農民が大事にされる平等な社会を目指していた。それで、一九八八年ソウルで行なわれた五輪の開幕式はテレビで見なかった。五輪はブルジョアの祭典としてみなし、国内ブル

ジョアの強化に悪用される恐れがあると判断したからである。

上記の話は私一人ではなく、当時を生きた大学生が共有する体験である。このような大学の雰囲気は「教養主義」を醸す絶好の環境をつくってくれた。社会科学と人文科学関係の本を読む学生が多く、大学の周辺に社会学専門の書店が相次いで出来た。キャンパスは討論文化が花をさかせて、自分の主張を正当化するために、マルクス主義の知識と一般教養を熱心に勉強しなければならなかった。農民と労働者と接しながら運動を展開する学生運動家は相当の教養を身につけていたと思われる。まだマルクス主義関係の書物が翻訳されなかった時であり、彼らはドイツ語と日本語を勉強しながら原書を読んだ。一般の学生はほとんど新聞と雑誌を読んでいて、「TIME」、「NEWSWEEK」等、高レベルの雑誌を読めるほど英語力も高かった。

韓国社会では「三八六世代」という言葉がよく使われる。この言葉は三十代の年齢で八〇年代に大学に通った六〇年代生まれの世代を示す。この世代の高等教育進歩率はそんなに高くなく、大学の数も多くなかった。「三八六世代」は一九八〇年代後半における韓国の民主化運動を牽引した世代でもあり、二〇〇二年ワールドカップ

を全国的に盛り上げた「赤い悪魔」の応援団を組織した世代でもある。また、多くの学生運動家が市民団体に入り韓国の市民運動を担っているばかりか、今の大統領の支持基盤でもある。日本のエリート学生文化が教養主義を生み出し、それが日本経済および社会の発展に大いに寄与したことと同じく、韓国の「三八六世代」が今後韓国経済と韓国社会の発展にいかに関与を果たすことが出来るか、注目されている。

韓国の大学における「教養主義」は一九八〇年代から一九九〇年代の前半までがピークを迎えて、その後衰退していく。韓国の政治は軍部独裁政権から民主政府に代わり、社会の民主化は前進した。韓国経済の高度成長は社会を豊かにさせると同時に、貧富の差は言われるほど深刻な状態ではなかった。高校生の大学進学率は約六割に達して大学の存在意義は弱くなり、大学生の「教養主義」は薄れていく。

二〇〇一年全国四二大学の学生一九七名を対象に大学生の読書実態を調査した資料を見よう。一カ月に十冊以上の本を読む大学生は全体の五・一%、三冊以上は全体の三三・三%を占めた。どんな本を読んでいるかを見ると、講義関連書物(二六・七%)、コンピュータと語学等の実用書物(一九・九%)、小説(二六・三%)、雑

誌(一五・五%)、詩集(八・四%)の順になっている。専門書物と実用書物を除いて、大学生が読まなければならない教養書は少ないように見える。

ソウルの延世大学の学生新聞社は二〇〇二年中央図書館の貸出順位と校内書店の販売順位を報告している。それによれば、専攻書籍を除けば小説とエッセイ類がほとんどを占める。小説は読みやすい大衆小説が多く、読書傾向は一般市民とあまり変わらない。しかし、新聞と雑誌を読む学生は多い。たとえば、地方のある大学は、学生の六五%が新聞を毎日読んでいると同時に二七・七%の学生が週刊誌や月刊誌を読んでいる。また、韓国の大学生は映画をよく観る。最近上映された二つの韓国映画にそれぞれ一千万人(韓国の人口は四千八百万人)の観客が訪れたが、観客は主に大学生であり、彼らが映画興行の決め手になっている。

韓国の大学は、時期は異なるが、日本の大学と同じく、「教養主義」が次第に没落の過程をたどっている。両国の教養主義の没落が、今後両国さらには東アジア地域に及ぼす影響をおよぼすか、関心を持って見極めたい。

(い) じょんひ・京都創成大学助教授

「増補版 夜学——こころ揺さぶる「学び」の系譜」（上田 利男 著）

夜学の源流を探り、「夜学ぶ」意義を見出す

田 中 欣 和

夜学の源流を探り、「夜学ぶ」意義を見出す

本書はまず「平成六（一九九四）年三月、大阪市内に残る、数少い大学夜間部の一つとして親しまれてきた、関西大学の天六学舎が姿を消した。」という記述から始まる。「勤労学生が二〇数パーセントという現状にあつては、やむをえない措置であつたかも知れないが、かつてそこで学んだ多くの人たちにとって天六学舎の消滅は一抹のさびしさを感じさせるものであつた。私自身にとつても、たばこ工場（現・日本たばこ産業（株））で働きながら、毎日のように京都から通学し、青春の思い出を残した学舎であり、その後再びそこに戻り、二〇年近く夜学生を教えてきた所だけに、天六の火が消える感慨は、ひとしおであつた。それがきっかけになつて、かね

て夜学の源流を探りながら、その重要性を確めてみたという思いが一举に高まり、小集団研究と指導の合間を縫つて積極的に資料集めを始めた。」というのが著者の執筆動機である。

著者たる上田利男氏は一九三一年生まれであるから、本学二部に学ばれたのは昭和二十年代、大学二部の存在意義を疑う人はほとんどなく、勤労学生の誇りが多くの人に共有されていた時代のはずである。氏はその後立教大学大学院に学び、日本専売公社勤務を経て小集団研究所を創立、所長となり、小集団活動に関する著作を多く出されている。本学二部では十八年間にわたつて小集団論の講義を担当されたという。本学の非常勤講師には、

本学学生を愛し、熱情をもって授業されて来た先生が多いが、氏もその一人であろう。

本書の原形は産労総合研究所『企業と人材』に長期連載された「人材育成と夜学の系譜」であり、それに加筆されたものである。

内容はたいへん巾広い。章のタイトルを示しておこう。

- 序 論 人生で何を学ぶか——夜学の精神
 - 第1章 夜学を生み出した社会の移ろい
 - 第2章 教育のめざめ——江戸庶民の夜学
 - 第3章 ころ揺さぶる知の欲求——私塾の夜学
 - 第4章 個性的な藩校と郷校の夜学
 - 第5章 多彩な夜学校のはじまり
 - 第6章 教育近代化を助けた初等教育の夜学
 - 第7章 心やさしい貧民夜学校
 - 第8章 私学の台頭を促した夜間専門学校
 - 第9章 明治の文学にみる夜学の風景
 - 第10章 産業の発展に貢献した企業内の夜学
 - 第11章 全国に広がった青年の夜学
 - 第12章 大学二部発展のあとの危機
 - 第13章 教育辺境にある定時制高校と夜間中学
- むすび——人生における夜学の真実

補論一・北海道開拓民の夜学

補論二・山本瀧之助と青年の夜学会

時代は古代・中世から現代に及び、対象も初等・中等・高等教育のすべてにわたっている。教育史の専門家ならばもっと焦点をしぼり、軸を定め、分析枠組を明示した書き方をするであろう。特に前近代の叙述で、①昼間に業務についている人たちのために夜開かれる学びの場、②教師側の事情で夜行われる講義（例えば医学を本業とする本居宣長の「鈴屋」での講義は「晩食後行われるのが常であった」）、③昼夜を分たず学ぶフルタイムの学生にとっての夜間の自習や輪読等の重要性……等が並列されるのは、近代夜学の源流を探るといふ観点からいえば異和感がある。

しかし、多分そういう観点からのみ本書を評するのはまちがいであろう。教育史の本は多く、研究者も多いが「夜学の通史」としてまとめたものは私の知る限りではない（私も教育史専門ではないが）。全体の概説、通史の類では勿論夜学について触れられるけれども主軸にされないし、特に前近代部分では「夜学」といふ観点は無視ないし軽視される。江戸時代後期の寺子屋の普及およびよく強調されるし、ドーアのように同時のヨーロッパ

諸国以上の識字率という人もいるのだが、寺子屋（の一部）の夜学の意義を強調する人は少い。「専門」ではない著者が夜学に学び、かつ教えてきたことの意味を対象化しようとするとき、専門家がまとめていないという事実面に直面し、それでも「知りたい」という生活人としての欲求につき動かされ「北海道から沖縄まで、ときには海外にも及んで、各地の図書館や教育遺跡を」めぐり、「到底さばき切れない資料に埋って」しまったという。

専門の人にはかえって難しい挑戦であったかも知れない。それにしても、著者の貴重な情熱の源泉からしても、近代・夜間・高等教育の部分をもつと書き伸ばしてほしかったし、本学二部で学び、かつ教えた著者の体験や同世代・異世代のきき取りをもつと活かしてほしかったと思う。本学専任教員にも二部出身者は稀ではないのである。

本学が夜間の法律学校から出発したことはだれでも知っている通りであるが、旧制の末期でも夜間の「専門部」には昼間の「予科」と違った誇りがあり、「むしろ専門部の方が優秀だった」という卒業生もいる。著者の学生時代はその時期のあとを受けている。いわば栄光の二部の時代だったと思う。本書にも出ている統計では戦後の大学生のうち夜間部学生の比率は昭和二十四年から

三十年は十五、十六%第、昭和四十年でも十%あったが、平成八年で四・九%というように低下してきた。また二部学生のうちの勤労学生・フルタイム就業者が減り、つまり「二部でなければ」という層が減って、その存在意義が疑われるようになった現在、著者の証言は貴重であるはずである。

評者が本学助手になったのは一九六七年、教育学科創設時であったが、当時から七十年代いっばいは二部の授業の方が楽しいという先生が多かった。竹内洋氏のいう「教養主義」の名残りが一部・二部ともまだあったし、一部生には乏しい生活者の知恵からの発言が二部では聞けたからである。公務員・公労協系を中心に労組積極分子である学生も多く、春闘前後など各職場のようすが授業前後に自然に聞けた。自治労中央書記長（連合副会長）植本真砂子さんも二部教育学科の二期生であった。

海老原治善教授と私の複数担当ゼミで「生活しゃべり方教育」と称して毎週自分の職場のことを報告してもらったことがある。教師側にとって一番勉強になった時間であった。今であれば、学部・学科を超えた教養ゼミとしてやってもいいことだと思う。

本学も二部をフレックス・コースに切りかえ、一部より入り易いから二部へという回路を切ったのは一つの見

識であつたにしても、それでは当然学生数は激減するから、数年のうちに再改革ということになるのは必至である。明治から戦後のある時期までの輝きを現代に取りもどす可能性について真剣な議論が必要である。発行後いくらか日が経過した本書を『書評』でとりあげようという編集者の意図もその議論のためであろう。「働きつつ学ぶ」ということに加えて「夜学ぶ」ことの意義も見出してゐる本書は、現二部・フレックスコースの学生諸君の論議にも多様な示唆を与えるかと思う。



私自身の今の考えでは、大学院修士課程の全学的昼夜開講化（夜間だけでも修了可能に）と一部のミニアチュアでない学部課程（教養学部・総合科学的なもの）づくりが現実的であろう。全体としては変質したとはいえない今二部・フレックスコースにもかかわらずの二部の良さを思い出させる学生は少くない。その積極面を重点的に把握する調査も必要であろう。著者を招いて連続パネル討論など企画してはどうだろうか。

（たなか よしかず・文学部教授）

「増補版・夜学——こころ揺さぶる」

「学び」の系譜」

上田 利男 著

人間の科学社

第一版一九九八年五月一日刊

増補版一九九九年四月二〇日刊

（本体価格二、五〇〇円）

普及版二〇〇四年四月一七日刊

（本体価格一、七〇〇円）

—— 自著を語る（増補版 夜学） ——

夜学の歴史性と魅力

上 田 利 男

心揺さぶる数多き夜学の史実

大学二部で学び、またそこに帰って教えるという機会に恵まれ、私の人生は夜学によって開かれたという思いが人一倍強い。

天六学舎が閉じられると聞いて、大学二部の源流はどこにあるのかをさぐってみようと思いたったのが、あてどない「夜学」研究の旅のはじまりであった。

小集団研究を一途に三十年あまり、後半は理論を応用しての実践指導が全国展開となり、各地に出かけることが多くなった。それにあわせて、関西大学二部での小集団理論の講義を受けもつようになり、それは十八年間に

及んだ。

平成の初めから各地に出向いたときは、必ず図書館、夜学遺跡をたどり、足らないところは独自に探索し、北海道から沖縄まで、すべての県を一応調べ終わるのに五年の年月を要した。

山積みとなった資料を体系的にまとめかけた頃、幸運にも「企業と人材」誌に「夜学と人材育成」の長期連載を始めることになり、夜学研究に拍車がかかった。

初めは大学二部に限定するつもりであったのが、古い時代までさかのぼることになったのは、手あたり次第資料を集めまわっているうちに、心揺さぶられる史実があまりに多く、そこに夜学の源流を認めたからである。

とくに江戸時代から明治中期までの夜学に心打つものが多かった。

とらわれの身となったとき、囚人たちに逆境のなかでの学びがいかに大切かを教えたのは吉田松陰の監獄の夜学であった。本居宣長は社会を先導する者の道を、「鈴の屋」の夜学であざやかに示した。

兵庫県青谿書院を訪ねたとき、強烈な衝撃をうけたのは、焼けこがれた便所の戸板にやむにやまれず夜学した人たちの思いを見たからである。寝る時間を惜しんで夜学にかりたてられたのは池田草庵の高邁（まい）な教えに刺激されての行動に違いなかった。

夜学のやさしさ、あたたかさにあふれたのは明治の貧民夜学校である。教える人の人間愛に触発されて、貧しい家のこどもたちの向学心が育まれていった。新渡戸稲造の遠友夜学校は格別といえる。

あまり知られていないが、松山にジャジソン女史の夜学校があったことも忘れてはならない。なぜかくも異国の女性が日本の夜学校に一身を捧げつくしたのか深い感銘をうけた。

二部前史にみる夜学の高まり

そして、心に残る夜学をつぎつぎに開花させたのは、

大学二部前史とよんでよい私立専門学校である。

専修学校（現・専修大学）では、社会への報恩奉仕を建学精神とした創始者たちが無報酬で教育にあたり、伝統ある夜学校にしあげていった。

同じように、教授連が公務のかたわら法学の普及にけん命な努力を惜しまず学生を鼓舞したのが関西法律学校（現・関西大学）であった。

東京物理学講習所（現・東京理科大学）は、東大生が学校から毎夜実験道具を借り出して授業し、世間を驚かせた。

三校とは少し遅れて、元料理旅館清輝樓での夜間講義から出発したのが京都市法政学校（現・立命館大学）である。

「専修大学百年史・上巻」、「関西大学百年史・通史編一」、「東京理科大学百年史」第一・二章、「立命館大学百年史・通史一」は、さながら明治の夜学史をみるごとく、充実した内容がおさめられている。

これらの私立夜間専門学校に共通しているのは、創始者や教授連が社会的責任を自らのものとして、犠牲をかえりみず教育に情熱を傾けたことと、その期待にこたえて、夜学生が勉学に想像をこえる頑張りをみせたことである。

村上浪六が『当世五人男』（明治二九年）で、関西法律学校第一回卒業生をモデルに、頑として当世の潮流におぼれず、魚鳥肉は月に三度にして苦学を貫いた夜学生気質を描いているが、あながち誇張とはいえないであろう。

勤労学生を鼓舞した夜学

私立夜間専門学校のよき伝統を受けつぐかのように、戦後多くの新制大学に二部が設けられ、経済貧困化のなかで、やみがない向学心に燃える勤労学生を受け入れた。大学生総数に占める夜学生の比率は、昭和二四年から三〇年にかけて一五パーセントをこえている。

二部学生の学力が一部学生をしのぐともいわれたが、それはきわめて限られていた。

だが最初に二部と名づけたのか知らないが、一部に準じて位置づけられ、あたかも一部のウラであるかのような二部とはよく表現したものである。学習環境や就職面での格差も歴然としていた。

だが、それでよかつたのではないかとも思う。

当時、二部に在学していた私は、一部に負けるものかの気がいに、夜学んだことが仕事に活かせる希望とこれからの人生に役立つという自信がいりまじった気持ちで、

挫けず毎夜大学の門をくぐったのを憶えている。

やがて、昭和五二年から大学二部で教える機会をあたえられたとき、自分の体験を思いおこし、夜学生をほげまし、交流していくにはどうすればよいかを考え、いくつかの試みを取り入れた。

毎年最初の講義では、夜学が人間にとっていかに大切かを語りかけた。逆境で培われる学力、働きながら現実を凝視して学べる特長、無為な時間をもたない充実感など二部学生にあたえられた強味について考えあうことにしたわけである。

後期には、ひとこともことばを交わすことがない状況をつくらないうために、講義のあと、あらかじめ小グループを編成し、順番に近くの喫茶店でミーティングするようになった。

最終講義の時間には、二部OBにも参加してもらい、夜学のあとをふりかえった。

毎年あたえることにした研究課題はかわりなく、「身近かにある小集団の社会的、心理学的考察」とした。レポートはまさに二部学生をめぐる家族、仲間、職場集団をとりあげての自己分析であった。四百あまりを数えるレポートは二部学生とのつながりを残すものとして、いまでも大切に保存している。

折にふれ求めた「二部に学んで」の感想文には、次のようなことがあった。

「二部に来たことは私の人生において素晴らしい転機であった。まだなにか発見がありそうだ」「学ぶ面白さを知ることができた。二部はこれからもこの形を続けていってほしい」「仕事と学問を両立させていく自信がついた」「自分の時間を使って学ぶ大切さを感じた」

いずれも八年前のレポートから選んだものだが、在学生の多くは二部の意義を認め、存続を望んでいた。

大学二部がこのような役割を果たしてきたのは確かであり、これから形態はかわってもこうした一面をもち続けるに違いない。

夜学の歴史的役割を終わらせるのではなく、むしろ夜学の魅力をよみがえらせることが重要性をおびてくるのではないだろうか。

根強い夜学への共感

拙著「夜学」（人間の科学新社発行）も地味な主題だけに、どれだけ反響をよべるのか心もとなかったが、新聞の書評にとりあげられ、各県の主要図書館の教育コーナーに並べられたこともあって、一年少しで増補版を出すことができた。

さらに、ある大学の教育課程で課題テキストとして六年間指定をうけている。いつかじっくり一部学生の夜学への共鳴と否定を確かめたい。

最近では松岡正剛先生推せんの本として、インターネッで広く紹介され、「迷うときこれを夜陰に少なからず鼓舞させる一冊」といつてもらえた。

おかげで増補版もこのほど出つくし、四月に第三版となる増補普及版が発行された。

あい次いで各地から読者からはげましたよすがよせられ、大いに勇気づけられた。

「いまの日本に必要なものが凝縮されている」「教育の昔日の温かさや熱気を思い出させてくれた」「毎日ムダな時間を浪費しており、夜学の必要性を痛感させられた」
夜学への共感が決して衰えていず、いまの時代にこそ、精神的ゆたかさをとりもどす夜学の輝き、魅力が必要とされているのではないだろうか。

今後も、毎月各地をめぐり溜め続けている資料を活かし、終生を托して、夜学の歴史性、精神性を問いながら、現代に響く「夜学」の書を生みだしていきたい。

（うえだ としお・小集団研究所主宰）

ロンドン便り

先日どろぼうに遭いました

マイルズ 純子

プロフィール

大阪生まれ。関西大学大学院社会学研究科博士課程修了。専攻はコミュニケーション論。言葉と対話について考えていた。哲学者J・クリシユナムルティ（一九九五～一九八六年）の生涯に興味を抱き、二〇〇〇年から一年間、イギリスのボロックウッド・パーク・スクールに留学。ロンドン在住。

先日どろぼうに遭いました。日本からイギリスに移って以来、また生涯においてもはじめてのできごとです。

どろぼうは私がキッチンで夕食の支度をしている間に玄関のドアをどうにか開けて入り、リビングルームにあった私のラップトップ・コンピュータ、フロップィーディスク・ドライブ、そしてすべてのデータが入ったディスクを持っていつてしまいました。

夕暮れ時、ヨガをして私がリビングルームをはなれてキッチンへ行ったのが五時過ぎ、夫が帰宅したのは六時前のこと。すべては五十分足らずの間に起きたできごとでした。どろぼうに入られたと気づいたのは夕食後で、私はそれまで何も知りませんでした。何者かが入りこんでいるというのに何も気づかなかつたなんてほんとうに信じがたいことでした。自分が情けないほどまぬけに思

えました。ですが、いつもキッチンでは音楽を聴いていることに加えて、ちょうどその時分は春巻きを作っていたので春巻きを揚げる大きな音がどろぼうの物音を遮ったのだらうと夫は言います。また、どろぼうは押し入っていちばんにコンピュータを見つけたので満足し、すぐ出て行ったのだらうと警察の人に言われました。どろぼうが短い時間しか滞在しなかったというのは事実なようで、持っていたのはコンピュータ一式のみで、すぐそばにあった携帯電話もCDプレーヤーも電子辞書も手つかずのままでした。

* * *

持っていたいかれたデータには書きかけのいくつかの論文、それらに関する一切の資料、好きだった詩や本からの引用、日本をはなれてから私がこの三年間に書きためていたメモやショート・エッセイ、詩が含まれていました。書くこととなると私はけっして饒舌ではなくて、自分のおもいと言葉のあいだで向かい合ってきた気力を思い返すと気が遠くなりました。ワードプロセッサを含めると十年以上、書く道具としてコンピュータを使っています。盗られたラップトップは使い始めて一年半の新しいものでしたが愛着を感じていたし、コンピュータは単なる機

械ではなく私にとつては使いなれたスケッチブックのようなものです。また、いろいろな場所や人々との出会いから集められてきた言葉の数々を思うとそれは大切なスクラップブックでもありました。

気づいてみると部屋のレイアウトからコンピュータ一式だけがすっぽり欠け落ちたようになくなっていました。同様にそれらは私の世界から、私から、忽然と消えてしまったのです。それらはまぎれもなく私の一部でした。腰が砕けるといふか抜けるといふか、涙も出さず、私はどうやって私の世界を構築しなおせばいいのか皆目わかりませんでした。けれども、その一方で何を失って何を失わなかったかを私はよくわかっていました。隣の部屋にかかった時計の音が気になって眠れないほど私は物音に敏感です。もちろんそんなに大きな住まいではありません。犯人がリビングルームへ行く際にガラスのドア越しにキッチンにいる私のすがたを見ていたことはまちがいありません。誰かがこの住まいに侵入して出てゆくまで知らずじまいで、私の身に何も起こらなかったのはまるで奇跡でした。

怪我をしていても、もしかしたら死んでいてもおかしくないのです。両手のひらを目の前にひろげてみると、この世にまだ、しかも無事で存在している自分のすがた

を見る事ができました。それが不思議であると同時に有難く感じられました。自分が生きていることの有難さに畏まるおもいでした。生きていてよかったと思うことは同時に生きていたいという自分のいのちへの望みを見ることでもありました。もう生きていたくないとこれまでに幾度となく考えたことの愚かさをつくづく知りました。何もさだかではなかったんだなあと思いました。結婚して専業主婦になって、毎日夕方になるとキッチンで揚げものをしたり、野菜を刻んだりするのは当り前のことと思っていたけれど、それもずっとあるわけではなくて、ゆきがかかりで容易に消えてしまうものだったんだなあと思いました。あるいはそうしてたえず何かが消え、何かが生まれているのが日常なのかもしれません。いまここにあるこの一瞬、確定して見えるこの現実がいかに稀有であり、同時にどれほど壊れやすいものであるかを見せてもらった気がしました。

いまとなつては自分というものがたよりなく、ちつぽけ、ごくごく小さなものに見えます。すべては偶然だという人がいれば、偶然などなくすべては必然なのだという人もいます。一体、何がどう作用して私がたすかったのかはわかりません。たすかったというより、たすけられた、たすけてもらったという思いが私のなかでは強く、

このできごとから私を感じたことは私に与えられているのちは私のものではないというか、この手のなかにあるものではないということでした。いまあるもの、現前しているありさまを失うかもしれない、失いたくないというおもいから人の恐れは始まるのではないかと思えます。つねに脆さははらみながらも現に存在する一瞬一瞬とそれを失いたくない、ありつづけてほしいという切なる願い。人の恐れと畏れ、そして祈りはここから来るのではないかとも思います。

* * *

その日以来、一日がとてつもなく長くなりました。一瞬ずつが山積みになつていくように一瞬ずつが一瞬ごとに存在してゆくのです。時間の軸が見えなくて、目の前のこの一瞬から先がたしかに感じられないのです。なにかかふつうの、元の生活に戻つてゆこうと夜には翌日の献立を考えようとなりました。ですが、数時間後に必ずやつて来る朝が信じられないのです。もちろん朝はやってくるのですが、朝には夜がまるで来年ほど遠いことと思え、夕方までの自分も生活も見通すことなどできませんでした。それでいて時折、いま目の前にある一瞬で知覚はいつばい、感情もふりきれて、涙がこぼれたりする

のでした。外に出てみると人のようすも街並みも以前と同じでした。ちがっているのは私だけでした。私のなかではなにかがまったく変わってしまっていて、何もかもが以前と同じようには見えませんでした。

とりわけつらかったのは人との応対でした。騒ぎ以来、夫は私を一人で家に置いておくことはできないといつてしばらくジムにも私を連れて行きました。彼のトレーニング中、私が受付近くのソファでぼんやり待っていると、どろぼうのことを彼から聞いた知人が次々に私のところに来てくれました。不思議なくらい人の反応は同じで、「大変だったね」の後には「うちも一年前に」「私も五年前に」「私の友人も先月」とその人たちのどろぼう騒動がつづくのでした。話が終わると皆、手持ち無沙汰になり「元氣出して。じゃまた」と消えていき、私はまたぼつくり残されるのでした。なにか言わなければという氣遣いがありますが、似ているだけで別の経験を持ち出されることでなんだか私の痛みは肩透かしされたようで、あるいはその人たちの痛みとすりかえられたようで、私は逃げ出したい氣分でした。

* * *

どろぼうなんて四六時中いたるところで起きているこ

くありきたりのできごとのようでした。しかし、それを知ったとしても、私のなかにできた穴は埋まりませんでした。自分はどうしようもないほど独りだと思いました。他人の痛みには思いをやるほど強い人はいないのかもしれない。悔しさ、恐怖、失ったものを悼む気持ち、日々の平安への氣づき。今回どろぼうに遭ったことで人の痛みやつらさをいままでとはちがったふうになるやうになるとしたらそれはいいことだなあと思いました。

そんななかで私を支えてくれたのは日本行きの航空チケットでした。ものごとは奇妙なもので、どろぼうに遭うその日の朝、私は格安のチケットを偶然見つけて予約していました。とはいっても、届いたチケットを握ってみたところで、そこに約束されているとおりに自分が大阪の地に着けるとは信じられませんでした。私はどんどん消耗していきました。命拾いさせてもらったと感じる一方で、知らずじまいだったとはいえ晒されていた事態への恐怖や不安は簡単には消えず、また、人とのコミュニケーションは他者と自分との溝を浮き彫りにするばかりでした。この現実もどんな感情も自分ひとりできぐりぬけなければならぬと思ひ知るにつれ、私はよくわからない闇に吸い込まれそうで、またもうそこに自ら身を投じてしまいたい氣分でした。消えてしまった言葉、私

の言葉にならないおもい、つづけなければならぬ会話……。もう何も考えなくなかったし、感じることもやめてしまいたかった。私は出発の日まで、一人でのこる夫に冷凍できる食べ物を可能なかぎりたくさんつくることに意識もエネルギーも集中しようと決めました。

* * *

どろぼうに遭ったその日から三週間後、私は日本に落ち、そこで三週間過ごしてロンドンの元の自宅に帰ってきました。住み慣れた町の空気に安堵し、会いたかった人にも会えて、私の気分はすこしやわらいだように見えます。ですが、それは単に時間の経過とそれ以外のできごとの積み重ねが私のどろぼう事件の記憶をおぼろげにしていくだけなかもしれません。あまりに繊細では毎日の生活はつらすぎます。意味としても経験としても大きく突出し過ぎるできごとはそうして多くの物事に紛れて、いつしか忘れることを待つより失う術はないのかもしれない。

私はいまこの文章を新しいラップトップ・コンピュータで書いています。日本へ帰った際に両親を持たせてくれました。自分を責める思いが強く、二度とラップトップもコンピュータも持たないつもりでしたが、かつて洋

裁の教師でいまでも服や帽子をデザインして縫いつづけている母が「持つてなきや駄目、うまくいえないけど私にとつてミシンみたいなものだと思うから」というのを聞いた時に私のなかでなにかが動きました。たくさんの感謝とさまざまなおもいで抱きしめるようにして持ち帰ってきた新しいラップトップで最初に書くものとして、どろぼう騒動をえらびました。このどろぼう騒ぎをめぐる一連のできごとはあたらしくいのちを授けてもらったように、私にとつて忘れることのできないひとつの大きな点だと思っております。

(まいるず じゅんこ)

謎のポートレート

河 盛 紗 弥

怖かった。髭だらけの顔に、もさもさした真つ黒い髪の毛。黒い帽子の正面には星の刺繡。カメラ目線ではないのに、見たら目が合つてしまいそうで、なるべく視界にはいらないようにしていた。特に夜は。

そのモノクロB5サイズの写真は、私の部屋がずいぶん昔、父と母の寝室だった頃から窓際の壁に掛けられていた。幼い頃から不思議で仕方なかった。「あれは誰だ？」何度か母に尋ねたことがあったが、母は、当時の私の頭で納得のいく答えは与えてくれなかった。そのことが余計に私の心を掻き立て、怖がらせ、そしていつしかへ聞いてはいけないこととして私の心の奥底にしまわれていた。それからまたずいぶん時が経ち、私は偶然その顔のイラストを目にする。まぎれもなく、私が怖が

っていた髭もじゃのあの顔！あんなに怖がっていたのに、なんだ？この親近感。大変驚いたことを今でも覚えている。そこでやっと、CDジャケットになったその人物の名前を、私は知ることになる。

（チエ・ゲバラ）キューバ革命の指導者。反帝国主義・ゲリラ活動・・・彼と共に使われる名詞はこんな感じ。写真の通り怖い人なんだろうな。そう思っていた。しかし先日、ゼミの友人にこの人物の話をしたところ、彼女は興味を持ち彼の本を読んだそうだ。感想は意外なことに「優しい人だよ。」だった。そうか・・・そういうられると、なかなか男前だな。なんて思ってしまった。余談だが、彼女がその本を電車で読んでいると、周りの大人たちから、じろじろ見られてしまったそうだ。



話を戻そう。私の家になぜそんな人物の写真が飾られていたのだろうか。答えは父から（案外簡単に）聞くことができた。それは父が尊敬していた（している？）からだ。私の父は現在五十五歳。大学時代は学生運動真っ只中であった。といっても彼は何かに属してヘルメットをかぶっていたわけではなく、放送部に入っていたため、マイクと録音機を持って、取材する毎日だったとか。しかしそこには確実に、自分たちの権利の主張や大人社会に対する反発心、大きな力の中に閉じ込められた自分たちのこの場所を変えたい！そんな気持ちがあったのだろう。（わかる気がする。やはり娘か。）でなければ私の部屋に写真は飾られていないはずだ。父はその時の話をとっても楽しそうに、そして自慢げに話す。この話は、話し

出したら止まらない。今考えると、母が私に詳しく教えてくれなかったのは、父を刺激するようなことを、私にしゃべらせたくなかったのかも知れない。
そんな謎が消えてしまった写真も、いつのまにかどこかへしまわれてしまった。そして私の父は新しい人生を樂しそうに歩き出している。三十九歳という若さで死んでしまった、チェ・ゲバラ。父には家族のために長生きして欲しい。心からそう思う。お父さん、お酒のみすぎないで下さい。

（社会学部・四年生）



仲見、丹羽光男 訳
みすず書房刊（本体2,000円）
1968年8月刊
1998年5月新装刊

「非行少年へのまなざし」

— 少年鑑別所の現場から —

高橋由仲 著
朱鷺書房（本体二、二〇〇円）
二〇〇三年五月刊



多くの人生の危機

一人の人間として尊重されてきたのだろうか

今日、日本の教育は、非常に困難な問題を数多く抱えている。

不登校、いじめ、非行、学力低下、学級崩壊：など学校教育に関わる問題から、虐待、自殺、家庭内暴力などの家庭教育に関わる問題まで、実に数多くの、困難な問題が山積している。もはや今日においては、これら多数の青少年の問題は、教育の世界だけに留まる話ではなく、一つ一つが大きな社会問題として、多くの学者、評論家に多角的に議論・研究されてきている。ま

た国などの行政側によっても政策などを通じて様々な試みがなされてきている。しかしどの問題をとってみても、あの手この手と対策は講じられてきてはいるが、実際は良くなる兆しが見えてこないでいるのが現状である。

昨年度（二〇〇三年）の内閣府の青少年白書によると、例えば、全公立学校における二〇〇一年度の「いじめ」の件数は二五、〇三七件、「不登校」の児童数は一三八、七二二人、「検査された」非行少年は一七〇、八二五

人であったと発表された。また厚生労働省の発表によると、児童相談所に寄せられた「虐待」の処理件数は、二〇〇一年度で二三三、二七四件と、実に一〇年前の約二〇倍にも及ぶ数値であった。（ただ、これはあくまで児童相談所による処理件数であって、児童相談所以外が対応したのもや、そもそも表面に表れなかった事例がまだ相当あると考えられる。）

これらの数値をみて、漠然と大きな数値だと思われるかもしれない。

しかし、言うまでもないことだが、これらの数値は、単なる統計上の数値ではないのである。これらの数値を積み重ねる一つ一つの数は、一人一人の「人間」であり、一人一人の輝くはずの、すばらしい人生の数々なのである。それが、万にも及ぶ、これだけ多くの「人間」— 児童たちが、多くの人生が、危機の状態にあるのである。S・O・Sを発し、助けを求めている状態にあるのである。

これは異常な事態なのである。本来、あつてはならない人生の破綻が多数起

きつつあることに、社会全体が鈍感になつてゐるのではないかとさえ感じざるを得ない。

私は、現代社会を生きる者のひとりとして、これらの問題を深く考えていきたい。

幸いなことに、大学在学中、私は様々な活動を通して、多数ある教育問題の一つの「非行問題」の中心に位置する「不良少年、非行少女」とレットテル貼りされた子どもたちに出会う機会を得てきた。

両親が厳格なエリート教師であるがために家庭での居場所をなくし、暴走行為を繰り返す少女、学校でのいじめが原因で自己防衛から逆に不良集団に關わつていった少年、親に捨てられ、養護施設で育つたことに劣等感を感じ、幸せな家庭をみると壊したくなる衝動が抑えられない少年；挙げればきりが無いが、一人一人いろいろな少年、少女たちがいた。そして考えられないような現実が、この一億総中流階級と呼ばれる日本にもまだまだ存在した、いや今も存在するのである。

「非行少年」と称される彼らは、本当に落ちこぼれなのだろうか？ 単に社会の鼻つまみ者でしかないのだろうか？

原因を挙げる者にも様々いる。「近頃の若者は」という古典的な新世代落胆論を吐く大人、日本人全体のモラルの低下と指摘する者、非行に寛容すぎるといふ刑罰論から法制度の不備を挙げる法律家、教育の偏り、親子関係の変遷、家庭と社会のしつけの低下、テレビゲームやマスコミの影響と叫ぶ者：一面的には非行の原因を言い当ててゐるかもしれないが、本当にそうだといい切れるのだろうか？

「今日はありがとう。また会えるよね？」

保護観察中の少年が、ボランティア活動終了後に私に声かけてきた言葉である。私が出つた彼らはそんな、とても純粋な子どもたちばかりであつた。

非行は、上記の原因で片付けられるほど、一面的な問題ではないのである。彼らに直に接し、行動を共にするにつれ、彼らは一人の人間として尊重され

てきたのだろうか、そんな疑問がいつも頭をよぎるのである。

本書は、そんな現代に起こる「非行問題」に関して、現岡山少年鑑別所所長の高橋由伸氏が、少年院や少年鑑別所の現場から、わかりやすく問い直してくれた書である。

職業上、万にも上る非行少年、犯罪者—そんな様々な事情を背負つた彼らとことんまで語り合い、彼らから「逸脱とは？」「人間とは？」「生きるということとは？」—そんな素朴な疑問を感じさせられた経験から、現在の教育制度、日本社会の有り様までと幅広く、そして鋭く社会を斬つた一冊である。教員を目指される方、青少年と関わりを持つ職業を志望される方、非行問題に関心のある方、果ては非行を経験なさつた方までなど、幅広く、多くの方々に本書を薦めたい。

(富山悟志・教育学科卒)

バートン版 「カーマ・ストラ」



大場正史 訳
角川文庫（本体三二〇円）
初版昭和四十六年五月三十日発行

「快樂は、肉体の存在と健康にとつて食物と同じように不可欠のものである。」（一七頁）

この本はバーツヤイヤナという人物がインドにあつた様々な性愛論書を四五世紀にまとめたものであるとされる。本の名前の由来は、カーマ（愛）、ストラ（経）であり、「愛経」と言

われることもある。

この本の説く性愛論は、インド古来の習俗や伝承や宗教観等が色濃く反映されているが、現在に生きる我々にとってみても示唆に富む内容となっている。何故ならそこに描かれている性愛は、男性誌やアダルトビデオによって作られた消費的で男性至上な性愛の技巧ではなく、男女共に性愛の快樂を研鑽していこうとする態度に貫かれたまことに求道的な内容であるからだと思う。またそのような探求的な性愛論が生まれた背景として、インドの人生観が考えられる。それは、人はアルマ（富）、ダルマ（宗教的価値）、カーマ（愛）の三つを調和させて生きていくことが幸福なことであるという教えである。つまりそれは、適度な富、性的快樂、哲学的な探求（私とは何か？といった）をうまく融合させて生きろということであり、この本はその中で特に性的快樂に焦点をあてた内容であるということができよう。

つまりセックスは学ぶもの、一生をかけて究めていくものの一つであると

いうことだ。それはもちろん体を鍛えればそれだけでいいというものではなく、最も大切なのは頭を使うことだ。言われるようにセックスは両股であるのではなく、両耳、両目、五感を使ってするものだろう。そのことを本書は具体的に、実践的に説明してくれる。

さて早く具体的な本の内容に移りたいのだが、二点だけ先に確認しておきたいことがある。一点目として、性愛（セックス）と恋愛の関係である。一般的に言つて、好きじゃない・恋をしなくてもセックスをすることはあるし、セックスをしなくてもいい愛は育むことが可能であろう。（年をとれば添い寝するだけお互いが幸せになれるというし、若い人たちもそういう経験はあるのではないか。）

この性愛と恋愛の関係は青二才の筆者では分からない部分が多いが、この本では恋愛は異性を「ものにする」ための長い長い「前戯」のようなもので、性愛（セックス）に主たる男女の関係は集約されていると思う。だがその「前戯」の記述は多くあるし、その重

要性を強調してもいる。まあ今言える暫定的な結論としてこの二つは分けられないものだとおこう。

二点目としてこの本が男女どちらの視点から書かれているのかと言えば、それは男からの視点である。だが、性愛も恋愛も相手がいて成り立つことであるし、男性の「手の内」を勉強して恋愛ゲームで一步有利な位置に立つためにも女性にとってもおもしろい本ではないかと思う。

さて、それでは前置きが非常に長くなってしまったが、本書の描かれた恋愛と性愛について書いていくことにしよう。まずは恋愛における実践的な男の態度から。

「青年は彼女が信頼に値すると考えている女に対しても親切な態度を示し、新しい友達を作らなければならない。」(二一五頁)

なかなかの得た言葉であるというか、恋愛において「噂」の果たす役割は大きいものであろう。特に大学の学部、ひいては学科などだと「噂」が勝敗を左右してしまう部分もなきにしも

あらずではないか。どんなに一途に彼女を想おうとも「女癖」が悪いなんて「噂」が立ってしまったら、青年は挽回するのが非常に困難であらう。それに人の恋路の話に限って噂が立つのが早い。そんな経験、特に中学高校としませんでしたか？ だから狙う子の周辺には「愛想を振りまいて」、信頼に足る男だというイメージを作っておくのがいいということだろう。

恋愛の記述の最後に青年が覚えておいてもいい箴言を書いておこう。

「要するに、この人なら自分の望みを何でもかなえてくれそうだと娘に思いこませる努力が肝心である。」もちろんこれは金銭的なことではなく、精神的な意味でだろう。

次に性愛の記述に移っていくが、刺激が強い内容ばかりなので、軽いところで接吻についての記述を紹介しよう。接吻は角度、また余った両手がどこにいくか！で十種類くらいに分類されている。そして接吻における力の入れ方が四種類ある（おだやかな接吻、きつい接吻、押つける接吻、軽い接吻）。

また時間帯、状況によっても分類されている。例えばこんなものがある。「男が夜遅く帰宅して、欲望を知らせるために愛する女にする接吻をへ目覚まし接吻」という。(七二頁)

いやはやキス一つとってもこんな奥が深いとは。相手がいる人は是非お試しあれ。

最後のまとめとして、作者自身がこの本に扱われている性愛に囚われる必要はないという。人それぞれに様々な性のあるプッシュ大統領が同性愛結婚の権利に対する規制を強めると言ったが、作者にとってみれば噴飯ものであろう。

また人はアルマ(富)だけに執着してはいけないというインド古代の考えは今日の意味を持つだろう。アルマ、ダルマ、カーマ、三つを調和させて生きたいものだし、それは非常に魅力的に思う。

まあ何よりも春です。楽しみましょう。

(文学部・四年生)

凶像で読み解く魔女の世界(二)

浜本隆志

はじめに

ヨーロッパの魔女狩りは、一六一七世紀ごろピークを迎えているが、これは今からみれば、一種の集団妄想によって引き起こされた惨劇であった。当時の人びとは、魔女が実在すると本気で信じ込み、その虚像におびえ、恐怖心から架空のイメージをどんどん膨らませていった。その結果、当局は徹底した魔女狩りをおこない、無実の人びとを裁判にかけ、身に覚えのない多くの被疑者を拷問の末、次つぎと処刑していった。犠牲者は七割以上が女性であったが、さらに男性や子供も含まれていた。これはまさしく歴史上、特筆すべき冤罪の典型例である。

では、なぜこのような奇妙な妄想が、ルネサンスを迎えた近代初期に発生し、またたくまにヨーロッパに蔓延したのであろうか。

その根は深く、多くのファクターがからんでいるが、まず根底には社会の不安感がおおきな引き金になったといえよう。魔女狩りの時代には、中部ヨーロッパではドイツ農民戦争(一五二四―二五)、プロテスタントとカトリックの確執や抗争、三〇年戦争(一六一八―四八)などが続き、混沌とした世相を呈していた。また当時は中世から近代への過渡期にあたり、人心が揺れ動いていた時代であった。さらに氣象学的にもちょうど小氷河期に相当し、気候が冷涼化したので、農作物の不作が続い

ていた。このような社会的な背景のなかで、人びとは精神的にきわめて不安定な状態におちいつていた。

ところが今述べた外的なファクターだけではなく、さらに掘り下げていけば、魔女妄想はキリスト教の女性観と密接なかわりあいをもつ。たとえば『旧約聖書』の「創世記」でも、ヘビにそそのかされたエヴァはパラダイスを追放されたが、この事例からわかるように、女性は原罪をもつものとされている。その女性観は、ヨーロッパ土着のとりわけ地中海地方の女神信仰や母権制の否定に根ざすものであった。

よく知られているように、キリスト教は苛酷な砂漠地帯の牧畜文化が生みだした父権制の宗教であり、神は男性である。この一神教がヨーロッパに浸透していくにつれて、土着の母権制と確執を生みだし、しだいにそれを排除していくが、このプロセスは、かつての女神信仰をデフォルメし、魔女化するきっかけをつくったと考えられる。

その後、民衆に尊敬されていた女神や女子言者、「賢い女」などは、しだいに得体のしれない者やうさん臭い者に変容させられ、妖怪とか魔女に仕立てあげられていく。したがって魔女像は、根底にはキリスト教の女性観と、ヨーロッパの基層文化との対立の歴史から生みださ

れ、勝利したキリスト教の世界観が色濃く投影しているといえよう。

しかし魔女狩りは突発的に出現したのではなく、その前例として中世ヨーロッパの異端狩りの歴史を指摘しておかねばならない。異端狩りのもっとも苛酷な事例は、同じキリスト教一派のフランスのヴァルド派、ボヘミアのフス派などに対するものであったが、これは中世ではなんども繰り返され、残酷な弾圧は、中世史に汚点を残し、現在にまで語り継がれている。その意味では、異端狩りは魔女狩りのプロトタイプであったともいえる。

さて、魔女狩りはヨーロッパ各地で発生したけれども、ドイツのそれが徹底性、規模、被害者数において群を抜いていた。魔女にまつわる多数の資料や記録が残されているが、ここでは、ドイツを中心に、ヨーロッパ各地の人びとにとって、魔女がどのように写っていたのかを、視覚的に考察してみることにする。

以後提示する多数の図像は、魔女の生成プロセスや魔女妄想、魔女狩り、裁判の実態を明らかにし、魔女の虚像と実像を浮き彫りにすることができるものと思う。なお紙面の都合で、論の展開は比較的長い連載というかたちになることを諒とされたい。

第一章 魔女のルーツ

リリト

リリトがアダムの最初の妻だったといえ、いささか驚く人がいるかもしれない。アダムの妻は、『聖書』ではエヴァと決まっているからである。しかし、現在でも引用したようなリリトの図像が残っている。これは紀元前一九五〇年ごろ、シュメールで製作された粘土板のレリーフである。

ここには豊満な女性の裸体像が彫られ、手に権威のシンボルのリングと笏棒とおぼしきものを持っている。頭には月のシンボル化した王冠をかぶっているが、さらに



リリト（前1950年ごろ、シュメールのバーニー奉獻板）

リリトは羽根を背につけて、自由に空を飛ぶことができ、黄泉の国にもいくことが可能であった。これは後に、キリスト教の天使や魔女の飛行幻想に受け継がれていくけれども、レリーフは、女神の超能力を示すものである。

さらに足の爪も人間のそれではなく、リリトは鳥人間であることがわかる。左右には夜のシンボルであるフクロウを従え、二匹のジャッカルの上に乗っている。これらは夜行性の動物たちであるが、とくにジャッカルは、エジプト神話ではアヌビスとされ、冥界の守護の役割をになっていた。このようにリリトには夜のイメージがつきまとい、彼女は月の女神といわれていた。古代から、月の満ち欠けと月経との関連から、女性と月は一体化したものと考えられていたからである。

伝説によれば、アダムが男女の交わりのさいに、男性上位を要求したが、リリトはその体位を否定した。理由は誇り高い女神として、男性支配に対する反抗心からであったとされる。その後、怒ったリリトはアダムのもとを去り、黄泉の国へ飛んでいった。そこで悪魔と交わり、悪魔の子を多数産むが、それによって彼女は、性的淫乱な不倫の愛の推奨者とされている。産まれた女の子は、やがて魔女となって男性を誘惑したという。

またリリト (Lilith) という名前は、英語のリリス



アルテミス (ヴァティカン美術館)

(現在の「巫」の語源)、すなわちユリをあらわす。ユリはキリスト教時代では、純潔をシンボル化したものであり、聖母マリアの属性とされているが、もともと形状から、女陰のシンボルでもあった。ここにすでに聖と性の両義の秘密が隠されているのである。

聖母マリアの「無原罪のお宿り」の伝説は、リリトにルーツがあるとされる。すなわち、リリトの聖なる女神としてのポジティブな側面が聖母マリアに流入し、もう一方、ネガティブでデモニックな側面が、悪魔的存在へと変貌したことを示している。さらに中世以降、それは聖母と魔女の二極に明確に分化されていくが、もとをたざせば両者は、人間の聖と俗、善と悪など、コインの両面のように裏と表の関係にあった。

このようにリリトは、女神の姿を色濃く残しながら、魔女的属性をすでに垣間見せている。これは文化人類学的に分析すれば、農耕文化と牧畜文化の対立をあらわすものといえる。すなわち農耕文化は、大地の豊饒な実りのシンボルを女神であらわし、母権的であったが、牧畜文化は男性中心の父権的特性をもっており、母権制を魔女化して否定しようとしたからである。

したがってリリト伝説はまさしく、ヨーロッパや近東で展開された基層文化としての母権制と、ユダヤ教やキリスト教の父権制の確執を背景にしながら、生みだされた女性像であるといえよう。勝利したキリスト教は、リリト伝説を「聖書」から削除し、アダムの妻をエヴァとしたのである。

女神とヘビ

次に確認しておきたいのは、古代の地中海地方で信じられていた女神信仰とヘビとの関係である。有名なアルテミスは、乳房を多数もち、恵みをもたらす豊饒の女神であったが、地中海の女神とヘビ信仰は、両者の深いつながりを示している。たとえばクノッソスの宮殿から、次ページの図のように、ヘビをもつ女神像が発見されており、このヘビは豊饒の女神の属性とされ、生命力の根



原罪、アダムとエヴァ

(グース1470年ごろ、ウィーン芸術歴史博物館)



ヘビを持つ女神

(クレタ島、イラクリオン博物館)

源のシンボルとみなされていた。

なお女神以外にもヘビ信仰が広がり、ヘルメスの杖も、二匹の蛇が巻きついたものがモティーフになっていたし、またオウロポロス（ウロポロス）といわれる尻尾を呑み込んだ蛇がいる。これはエジプトの「世界を呑み込む蛇」に由来するのであるが、オウロポロスの図像は地中海地方に広がっており、はじめと終わりの連続性、すなわち永遠を意味するとされた。

このような地中海のヘビの文化は、ポジティブなものであつて、もともとネガティブな意味はなかつた。ヘビは脱皮を繰り返し、不死、生命力のシンボルとして、むしろ古人にとつて崇められるものであつたからである。したがつて信仰の対象とされ、護符として指輪、ネックレス、ブレスレットのモティーフに用いられ、たいへん好まれていたので、ヘビにちなんだ多くの出土品がある。

ところがヘビはキリスト教においては、『創世記』のアダムとエヴァの話にあるように、邪悪と罪のシンボルとされている。なぜキリスト教時代には、このような価値転換がおこなわれたのであろうか。いうまでもなくヘビは、異教の女神信仰のシンボルであり、男性神を崇める一神教としては、それを容認できなかつたからである。キリスト教以前のミトラ教もそうだが、父権的な一神教



メドゥーサ (トルコ、アンタリア博物館)

は、ヘビを異教のシンボルとして排除すべき対象として
いる。キリスト教化されて以降、ヨーロッパでは、死者
にまつわりつくヘビが多く登場してくるが、それはヘビ
がキリスト教では、死と地獄につながるものと理解され
てきたことを物語っている。

有名な『聖書』のパラダイス追放の場面は、図像にた
びたび描かれており、その一例を前ページの原罪の絵で
示しておく。図に描かれているように、アダムとエヴ
アの暮らすパラダイスにヘビが侵入し、エヴァをそその

かす。とくにヘビは、図でも明らかであるように、女性
のイメージを残しているが、地中海地方の女神とヘビの
信仰の残滓がここにも明瞭に認められる。

エヴァが「知恵がつく実」というヘビの言葉につられ
て、禁断のリンゴを手にとり取って食べ、アダムにもそれを
勧める。しかし神の教えに背いたために、二人は羞恥心
を感じ、神はアダムには食料を得るための労働を、エヴ
アには出産の苦しみを与えられる。とくに彼女は女性と
しての原罪を負わされ、二人はパラダイスから追放され
るのである。

その際、誘惑したヘビが握ったり、巻き付いたりして
いる木は、重要な意味をもっている。これもヘビの否定
と同様に、原始のアニミズムに由来する樹木信仰の排除
を暗示している。キリスト教にとって、ヘビ信仰と同じ
く、異教の樹木信仰も排除しなければならぬ対象であ
ったからである。やがてアニミズムにもとづく樹木信仰
は、キリスト教の場合、十字架信仰に転換されていく。

さて女神とヘビの否定は、具体的には知恵の女神メド
ウーサに典型的にあらわれている。たとえばかつての美
女メドゥーサは、にらんだ相手を石に変身させるという
怪女に変えられてしまった。そしてメドゥーサは冥界の
支配者として、髪の毛がヘビと化したグロテスクな生き

物とされた。とくに図に示したルーベンスのグロテスクなヘビと、メドゥーサの絵はその価値転換の結果を如実に示している。



ルーベンスのメドゥーサ
(ウィーン芸術歴史博物館)

さらに怪女メドゥーサのモチーフは、後に魔女とも深くかかわってくる。メルヘンではあるが、有名な『白雪姫』の継母は、白雪姫を殺そうと狩人に命じ、肝と肺を手に入れようとする。この行為は白雪姫という、美のシンボルの生命的な根源を食べることにより、美しい白雪姫と同化しようとするカニバリズム（人肉嗜好）にもとづく。それに失敗した彼女は、今度は変装して、白雪姫にヒモ、クシ、リングを売り付け、とうとうたくらみに引っ掛かった白雪姫は、最後は仮死状態でガラスの棺に葬られる。

これらの小道具はメドゥーサのヘビ（ヒモ）、髪（クシ）、石（ガラスの棺）などのイメージにつながるものである。たしかに白雪姫の継母は、表面上では魔女ではないが、実質上は魔女として描かれ、最後に真っ赤に焼けた鉄の靴をはかされ、死ぬまで踊り続けたのである。これは魔女の残酷な火あぶりの処刑を連想させるものがあり、美がグロテスクにデフォルメされた一例を示すものであろう。

(この稿続く)
(はまもと たかし・文学部教授)

連載

本のいろいろ⑨ 関大図書館―百科事典―

仲井 徳

百科事典に挿絵は必須のものである。

今回は『和漢三才図会』

全一〇五巻八十一冊 寺島良安著

正徳二（一七二二）年自序刊

[R/031.2/T1/1~105]

和漢古今にいたる万物図鑑・江戸時代中期に出来たわが国最初の絵入り百科事典である。中国明代十六世紀半ば、王圻の百科辞典『三才図会』全一〇六巻に範をとった構成で、中国の事物に日本の物を対比させて編集している。

一六〇年後の編集で、和漢の文献を渉獵して膨大な実用的知識を網羅してある実用書。

編著者寺島良安については詳しい事はよく分っていない。大坂城の御殿医で、最高位の法橋であったが、生没年不詳。

すこし後の、十八世紀半ばに出版されたデイドロ、ダランベールによるフランス『百科全書』全三十九冊がフランス市民革命を準備したことと比べると、インパクトの差は違うとしても、しかし、この本以降、本格的な百科事典は

明治四十一（一九〇八）年の『日本大百科事典』まで二百年も待たなければならなかったほど、利用された百科事典であった。

[C/35/E/1/1~39]

『和漢三才図会』は早く明治時代に活字版が出版されているが、日本庶民生活史料集成二十八・二十九巻に翻刻されている。

[382.1/N/4/28~29]

使いやすいのは、東洋文庫で十八冊本として刊行されていて、手軽によめ、さすがに五十音順の索引が付いていて便利である。

[081.6/T/3/447~]

さらに便利で有用なCD-ROM版二枚大空社が出ています。

[N8/NM/031.2/1~2]

電子化により、検索、取込み、編集が格段に便利である。

興味が起こった人は、寺島良安について調べてみてはいかがでしょうか

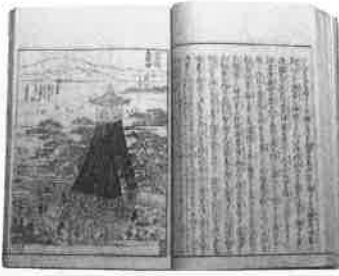
（神戸女子大学教員・元関西大学図書館員）



（関大図書館所蔵）



ざごぼ 雑喉場魚市



でふりんと たかとうろう 出見湊・高燈籠

連載

本のいろいろ⑩ 関大図書館―名所記―

仲井 徳いさよ

名所・案内記にも挿絵は必須のものである。

今回は『撰津名所図会』 九卷十二冊

秋里籬島著 丹羽桃溪・竹原春潮斎ほか画

寛政十(一七九八)年刊

〔和〕291.63/A12-1/12〕

を紹介する。

KOALAで検索すると、道中記八十九点、旅行記一四五点、案内記三四三七点ヒットする。旅行ガイドブックはいつの世もおお流行である。土地に縛り付けられていた江戸時代でも、

観光は庶民の大きな楽しみであった。はじめ、秋里籬島は本拠地京都の名所記『都名所図会』を出版したところ、ベストセラーになり次々に各地の名所記が刊行された。その数約四十種類。

そのうち大阪に関するものが、『撰津名所図会』と『河内名所図会』である。大阪の地名、名所、寺社などの沿革を絵入りで解説するが、歌枕に詠まれた地や宿駅、橋、川などの実況も取入れ道中案内にもなっている。

大阪の名所記の初めは百年も前に、『昔分船』が出版されている。関大図書館所蔵のものは、日本一といわれるほどの優品である。

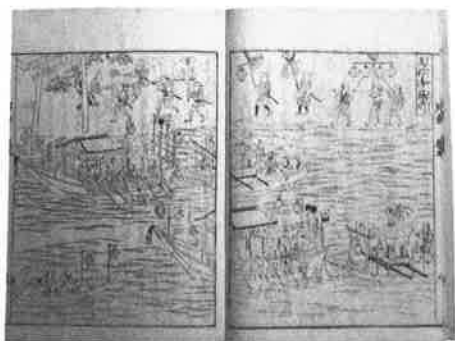
『昔分船』六冊 一無軒道治著 延宝三(一六七五)年刊 [C/291.63/1/1-6]

一般書庫の『昔分船』[291.63/A4/1-6]は、上記を大正十三(一九二四)にだるまや書店が複製したものである。

挿絵画家・丹羽桃溪(一七六〇―一八二二)は大阪の画家。前回紹介の『紙漉重宝記』、今回の『撰津名所図会』と『河内名所図会』及び『鼓銅図録』等の挿絵作品がある。『鼓銅図録』は大阪の大富豪・住友家の銅吹きを図解した工業資料としても貴重なもので、いずれ詳説したいと思っている。

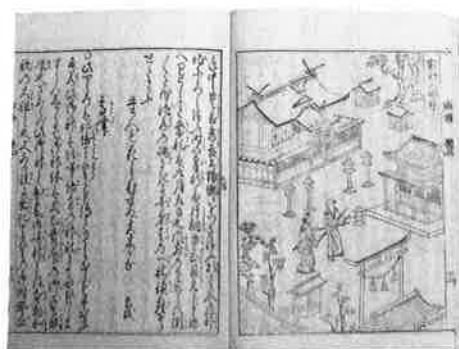
(神戸女子大学教員・元関西大学図書館員)

(関大図書館所蔵)



〔芦分船〕

天神祭



生田神社境内



四つ橋

連
載

とりとめのない備忘録 (二)

—— 幽芳の掘り出し本 (三) ——

田 中 佳 吾

前回、大阪の夏の暑さと蔵書の置き場所に困ったあげく、三十ウン年来、生まれ育った大阪市内から京都の西陣の町家に平成十四年の秋に引越しをし、家から自転車で五分ほどの距離にある北野天満宮の骨董市で、菊池幽芳の『乳姉妹(ちきょうだい)』の前編と後編(前編・明治三十七年一月一日発行の初版本。後編は明治三十七年五月二十五日発行の再版本〔初版は同四月十五日)〕を二冊揃いで格安の二千円で買ったところまで叙べた。雑談が長すぎて肝心の幽芳については殆ど触れず仕舞いであった。で、今回もやっぱり雑談から。

こんどは古本屋で『己が罪』をみつける

北野天満宮の骨董市で幽芳の『乳姉妹』を見つけてから数カ月後、こんどは大阪の某古書店、と云うより町の雑本しか置いていない古本屋の棚で幽芳の『己が罪』前・中・後編三冊揃い（前編・明治三十四年十月十五日発行の十五版〔初版は同三十三年十二月二十九日〕。中編・明治三十八年九月二十日発行の七版〔初版は同三十四年七月五日〕。後編・明治三十三年九月十五日発行の三版〔初版は同三十三年八月十日〕）を手に入れることになった。短期間のうちに幽芳の代表作が二作とも見つかるとは。またまた嬉しい。

しかし『乳姉妹』にくらべて本の状態があまり良いとは云えない。「手沢本」と云うか「汚損本」である。背部は三冊すべて茶色のハトロン紙で補強され、そのハトロン紙が裏表紙となっている。本来の裏表紙はそのハトロン紙の内側にあるものの、後編には本来の裏表紙が無い。さらには前の持ち主の蔵書印ならぬ住所印（岡山縣萬富駅前／坂本某と、廣島市幟町百六十一番地／古本賣買業・貸本業／保田筑後屋）が表紙だの口絵だのにベタベタ押しである。貸本屋にあった本と云うことで、本の疲れ具合も推察されたい。

それでもわたしはその「汚損本」を購った。三冊揃いで千四百円と云うのは、美本の場合の十分の一以下の値段である。

この日、その雑本屋に一歩足を踏み入れた時に棚の雰囲気がいつもと少し違うことに気がついた。全体に今までこの店ではお目にかかることのなかった、古書業界で云うところの「黒っぽい本」が大量に並んでいたのである。店番をしていた奥さんらしき六十歳前後の年配の女性に、

「古い本がえらい増えましたなあ」

と、棚のことをそれとなく指摘してみるとその女性曰く、

「主人が病気で長いこと床に臥つてて、今のうちに倉庫にある本に値段だけでも付けといて云うて頼んでますねん、ウチら店番はできても本のことはなんも知らんよつてにな」

『新己が罪』？

成るほど、それでかと合点がいった。『己が罪』を左手に持ったまま、他に何か面白いものはないか探していると、今度は『新己が罪』というタイトルが目飛び込んできた。棚から抜いて奥付を開くと、大正二年十一月

十日発行の十版（初版は明治四十二年四月二十八日）で出版社は磯部甲陽堂とある。著者は河田鳥城と云う人物。後日、この作家について調べてはみたのだが、今のところ調べ尽くしてないのでまだ分からない。巻頭言には「菊池幽芳先生足下」としてこんな一文が掲げられている。

——《余は拙著『新己が罪』を上梓するに先ち、一度足下の高閣を煩はさんことを望み居たりき。（中略）近時坊間往々にして羊頭を懸けて狗肉を賣るの陋を敢えてするものあり、拙著は即ち足下の名著『己が罪』に新の一字を冠せしものにして一見或はこの謗を招くなきを憂うれば也されど余が足下名著の標題を踏襲せしは、足下を賣つて利せんとするが為に非ず、拙著の内容を表示するに當り『己が罪』なる標題が極めて適切なるを覺えたれば也。（以下略）——。

要するに駄作に『己が罪』のタイトルを付けて二匹目のドジョウを狙ったとはちやいまつせ、と云う言い訳めいたことがくどくど書かれている。巻末には八ページばかり出版案内があり、そこには『新己が罪』と並んで

“かへで生”作『新金色夜叉』と云うのもあった。この本の巻頭言にも「尾崎紅葉先生足下」とする一文が掲げられているのだろうか。さらには樋口一葉ならぬ樋口二葉という名の著者の本も三冊見える。磯部甲陽堂と云うのは貸本専門の出版社なのかも知れない。とするとそこから出ている本の著者も大半が無名の「貸本作家」と云うことになるが、これも調べてみないと分からない。

余談だが幽芳と紅葉は、明治二十六年十月下旬に京都の稲荷山で開かれた「関西新聞記者懇親会」で出会つて以来、親交をつづけることになる。昭和初期に大阪毎日新聞社会部に席を置いたこともある高木健夫氏は、著書『新聞小説史 明治篇』（国書刊行会発行・昭和四十九年十二月十六日刊）のなかで、幽芳がその後の明治三十年に文芸部主任となつてから、泉鏡花や小栗風葉、小杉天外など、紅葉を中心とする文学結社である「硯友社」系の作家の作品が大毎の文芸欄を飾ることになつたことについて、《——紅葉の斡旋があつたにちがいない。》からだとしているが、幽芳と紅葉の親交が深かつたことは、のちに紅葉の長男夏彦と、幽芳の三女豊乃が結婚するなどのことから伺うことができるだろう。

ところで『新己が罪』は本家の『己が罪』より値段が高く、美本で三千円もしたのだが、「これも何かの縁」

と思い、その時ついでに一緒に購って帰った。が、ツン読のままである。

幽芳と渡辺台水の縁

菊池幽芳は本名を清と云い、別号は「あきしく」。

本業は大阪毎日新聞社（現・毎日新聞社）の政治記事などを担当する記者だった。明治三年十月二十七日水戸に生まれ（昭和二十二年七月二十一日没）、明治二十八年に当時、大阪毎日新聞社（以下、大毎）の初代社長兼主筆で同郷の渡辺台水（本名・治）の知遇を得て大毎に入社した。台水は当時二十五歳で福沢諭吉門下に学ん



「己が罪」前・中・後編



「己が罪」中編口絵 阪田 耕雲 画



「己が罪」後編口絵 武内 桂舟 画

だ一人。「鉄血政略」、「欧州戦国策」（ともに明治二十一年刊）などの著書をはじめ、スペンサーの『社会学原理』第二巻を『政法哲学』（明治十八年刊）の書名で、デイスレイリの政治小説『エンヂミオン』を『政海之情波』（明治十九年刊）翻訳、さらにはシェイクスピアの『間違った喜劇（コメデイ・オブ・エラス）』を『鏡花水月』（明治二十一年刊）の書名で翻訳（『政法哲学』は浜野定四郎との共訳）、出版するなど、世間にその名を知られている文人だった。しかもこれら五冊の著訳書は台水が二十四歳までに立て続けに出版したもので、文学・語学ともに才能豊かな人だったが肺結核のため明治二十

六年十月十五日、社長兼主筆のまま惜しまれつつ世を去る。弱冠二十九歳。

台水は当時、東京の主要な新聞が小説を掲載することは蔑まれるべきことだとされていた中であつて、反対にその重要性を主張、大毎入社と同時に「小説に対する意見」を社告として紙面に掲げた。幽芳の『自叙伝』（國民圖書株式会社刊『幽芳全集』第十三卷所収・大正十四年二月二十八日発行）につきのような記述がある。

——《先生（筆者注・台水のこと）のその『小説に對する意見』の中にはかういふ意味の事が書かれてある——世間には小説の掲載は大新聞の面目を傷つけるものとの説があるが、元來東京新聞の専ら政治を論ずるものは、今日まで小説を掲げぬ習慣があつたので、繪入の小説の入つた新聞を小新聞と唱へ來つたに過ぎない。併し政論は政論、小説は小説である、小説を掲ぐるからとて政治新聞の體面を汚す理由は毫もない。西洋の例を引くと英吉利と亞米利加の新聞は、日々小説を掲ぐるものも少いのは事實であるが、歐羅巴大陸に行くと、佛蘭西や伊太利の新聞は、如何に高尚な政治新聞でも小説を掲げて居らぬものはない。（中略）元來日本人は文學の思想に

富み、美術を愛好する等風流洒落の點佛人の如く、温和な氣候秀麗な山水の間に育まれ、情熱と敢爲の氣象に富める事また伊太利人に似て居る。されば日本人が政治新聞たる大新聞に佛伊の如く小説を掲載するに、更にその不都合の所以を見出せないではないか、殊に江戸ツツの殺風景なるは英米人の如く、京阪人の優雅なるは佛伊人に似たりともいへる、今後はますます小説に力を盡し、これを進歩向上せしめて、改良小説（そのころは改良といふ語が題目であつた）を掲載する方針である云々。今日では如何なる大新聞も小説を掲載せぬものはないが、その嚆矢をなすものは、實にわが台水先生であつたといつてよい。（以下略）——。

右のような「意見」のもと、台水から紙面に掲載するための小説および翻案を執筆するよう命じられた幽芳は、のちに渡辺霞亭などとともに「家庭小説家」と称されるまでになるのである。

話が少し逸れるが台水を大毎に招じたのが本山彦一だつた。本山は台水が大毎に着任する一カ月前の明治二十二年四月に相談役に就任していた。本山の略歴を『毎日新聞七十年』（毎日新聞社刊・同社社史編纂委員会編・

昭和二十七年一月二十五日発行) から引いておく。

——《本山氏は嘉永六年(一八五三年)熊本に生まれ明治七福沢諭吉氏に知られてその門に出入、その後官界にあつたが、十五年大阪新報に入つて新聞生活を踏み出し、十六年時事新報に移つて総編集、十七年会計局長となり、十九年七月藤田伝三郎(筆者注・大毎出資者の中心)氏に招かれて大阪の藤田組支配人に転じ、(中略)藤田氏の了解と本山氏の承諾を得て、二十二年四月、藤田組支配人のまゝ、本山氏を相談役として迎えた。その時、本山氏は三十七歳であつた。》——。

本山はその後、明治三十六年十一月十日、五十歳の時に大毎五代社長として就任、昭和七年十二月三十日、七十九歳で病没するまでその職にあつた。大毎の大躍進時代はこの「百パーセントの社会事業家」、「社会事業の慈父」、「社会事業大衆化の功労者」と称せられる本山ともにあつたと云われている。

因みに現在の「関西大学博物館」の収蔵品はこの本山個人が所蔵していた「本山考古学資料(本山コレクション)」がもとになつており、故・末永雅雄名誉教授が仲

介の労をとられて本学に収受されることになつたことは周知の通りである。また、総合図書館には本山の旧蔵書である「本山彦一文庫」がある。さらに本山の略歴のなかに出てくる藤田伝三郎は明治期の大阪財界で指導的地位にあり、関西大学の前身、関西法律学校の評議員も務め、学校経営を側面から支援した人物だ。

台水の命で小説を書く

話を幽芳に戻そう。

幽芳は台水との共訳と云うかたちで翻案小説『光子の秘密』(原題「パーサス・シークレット」)を執筆、それが明治二十五年二月二十六日から四月十一日まで大毎紙上に掲載されることになるのだが、その頃台水は肋膜炎で病の床にあつた。自らが紙上に載せる翻訳小説の筆をとるつもりだったが病のためにそれができない。そこで幽芳を病床に呼び寄せて翻訳を託すことになる。前出の『自叙伝』にある「大毎に出た私の最初の小説」の項で、幽芳はその経緯を以下のように書いている。

——《私への用向きといふのは来る二十五日で小説が無くなるから、二十六日の紙上から新小説を載せなくてはならぬ、自分が翻訳小説を書くつもりで居

たが、病氣で連も書けぬから、君に翻訳を頼むといふのであった。(中略)枕頭にある西洋小説を取つて、私に渡されたのは *Bertha's Secret* といふ三百頁許りのものである。(中略)どうしたものかど當惑してゐると、先生は苦しげな息の下から、それは翻訳するので一々翻譯しては駄目だ、つまらないところは遠慮なく切り捨て、行き、また付け加へるところは付け加へて行く、その働かせ方が骨で、つまり一種の創作である、そのつもりで筆を取るやうに(中略)兎に角君の試金石だ、やつて見るがよからうといはれ、私は多少の感激と共に肩いさよくお受けをした。》――。

この一文のなかに「翻案小説」がどのような手法のもとに書かれたの記述がある。幽芳も台水同様に語学の才には長けていた。が、台水は新聞に載つたあとの『光子の秘密』に、病床から毎日のように朱を加えて幽芳のもとに送つた。幽芳は『先生が毎日私の小説に加えられた朱書は、どれほど私の研鑽の資となつたものかもしれない』と書いている(前掲書)。

『光子の秘密』が掲載された後、明治三十二年八月十七日から『己が罪』の連載(同十月二十一日まで)を始

めるまでの間、幽芳は大毎紙上に計十四本の創作・翻案・翻訳を連載している。この間の明治二十六年五月には台水の発案により、幽芳はじめ相島双翠(勘次郎・別号に虚吼)、高木扇城(利太)ら大毎の記者が中心となつて、大朝(大阪朝日新聞社)系の渡辺霞亭や西田天囚らが発行していた文藝雑誌『なにはがた』(明治二十四年五月創刊)に対抗するかたちで『このはな草紙』を大毎系の文藝雑誌として創刊した。幽芳は『このはな草紙』にも小説を書いている。創刊号の表紙の題簽は幽芳が筆をとつた。

『己が罪』の連載がはじまる同じ年、明治三十二年一月十五日の大毎紙上に「文学欄創設の辞」という幽芳の書いた一文が掲載された。幽芳は明治三十年に文芸部主任になつていた。この年、大毎に編集総理(翌三十一年九月に三代社長に就任)として入社したのが、のちの第十九代首相で「平民宰相」と云われた原敬である。原は「文学欄」創設のほか、家庭面のルーツとなる「家庭の菜」欄を新設するなど、大毎に編集面で新しいアイデアをつぎつぎと採り入れた。難解な漢字の紙面での使用を制限する「漢字減少論」や総ルビ活字を廃止する「ふり仮名改革論」などが知られている。これら原の主張は口語体で紙上に連載された。読者が読みやすく解りやすい、

読者の要望に配慮した新聞を目指したのだった。

幽芳の「文学欄創設の辞」は『毎日』の三世紀——新聞が見つめた激流130年(上巻) 毎日新聞社刊・同社130年史刊行委員会・平成十四年二月二十一日発行)に、記事の趣旨が紹介されている。

——《大阪は昔から文学に縁故が深く、文学雑誌も盛んに発行された。にもかかわらず、このごろは雑誌も振るわなくなり、「渾然たる暗黒界」だ。そこで、浪華文壇興隆のため、また関西文学者の活躍の場として本社は「文学欄」を設ける。大阪紳士などといつても、話の種といえば、米相場、株式、花柳界のことばかりでないか。人間が金もうけのことはかりに夢中になっていると、円満な人格は形成されない。金儲けも結構だが、同時に高尚な思想を持つべきである。金もうけのことをのぞけば、あとは頭がカラッポとは、人類の墮落である。自称「大阪の紳士」がこんな状態だから風俗乱れ、せせこましい気品のない人間ばかりになるのだ。これで大都会の市民とは恥ずかしい限りだ。本社はこのような大阪のために、大阪文壇の維持を目指す。文学に関する評論、記事などの寄稿を歓迎するから活用してもら

いたい。》——。

この「文学欄創設の辞」の呼びかけの対象は「大阪の紳士」ということで男性読者に限定されている。小説の読者は男女問わないが、明治三十年頃では小説の書き手は、まだまだ男性が主流と云う認識が、幽芳のみならず世間一般にあったことの一つの証左になっている。それにしても「大阪の紳士」に対してかなり痛烈な批判のされ方である。当時の読者がこの一文を読んでどう反応したのか知りたくなってくる。「金もうけのことをのぞけば、あとは頭がカラッポ」「風俗乱れ、せせこましい気品のない人間ばかり」「大都会の市民とは恥ずかしい限り」と云いたい放題で、大阪の地で暮らしながら水戸出身の関東人である幽芳は、かねがね「大阪人って奴は」とあきれていたのかも知れない。大阪人のDNAを受け継ぐわたしは苦笑を禁じえない。まあ、裏を返せば大阪人を叱咤激励しているということか。

——以下、次号——

(たなか けいこ・関西大学図書館委託司書)

連載

近代日本文学史を考える (三)

——文芸編集者の回想を手がかりに

吉田 永宏

(三)

改造社解散 作家・中村真一郎が「第一回文藝賞の前後の問題 頃と現在と」(『文藝』一九八七年十二月)の中で、「戦争直後の日本の文化復興の燃えるような理想主義の一時期は、今日では想像もつかないような高邁な——屢々現実離れをした——名編集長を生んだ。その最初は雑誌『人間』に拠る木村徳三氏であり、若き坂本一亀はその殿将であった。」と記している。中村真一郎をしてこのように言わしめる程の名編集長で木村徳三はあったのだ。

戦後のその『人間』時代の木村徳三について述べる前

に、彼が『文藝』編集者であった頃の(改造社解散前後)の問題に触れておかねばなるまい。

昭和十年代が、日本の近代文学史上、際立って多彩な収穫期だとするのが定説になっているが、木村徳三は、「それは太平洋戦争の勃発によって終止符を打たれたと行ってよい。」と言う。その端的なあらわれは、その年の夏、『東京新聞』に連載中の徳田秋声「縮図」が当局の圧力によって掲載中止させられたことであったという。その時勢についての木村徳三の証言を次に引いておこう。

時勢はそこまできていたのかという感が私たちの胸に痛烈にきた。『文藝』にあっても、昭和十四年

に高見順氏の「如何なる星の下に」、十五年の中野重治氏の「空想家とシナリオ」の連載以後は、これという佳品は得られなかった。表現の自由を奪われた文学者の大半は沈黙せざるを得ず、しかも第一線の現役作家の多くが、それまでは戦地視察のかたちで派遣されていたが、開戦後は、軍部及び情報局の指令によって動員徴用されて、あるいはビルマ、マレーに、あるいはフィリピン、ジャワに渡っていったのである。私も何度か東京駅へ作家たちの出征を見送りに行った。普段めつたに見ることのない厳しい眼光の井伏鱒二氏、緊張の面持ちで口尻を片頬に曲げた阿部知二氏、軍刀を腰に下げてむしろいそいそとした挙止の高見順氏、いつもの反骨の風貌のまま竹橋の衛門をくぐって行った武田麟太郎氏……それぞれ面影が今もおぼろげに次々浮かんでくるが、そのときそれらの後ろ姿を送りながら、それが徴用というよりも現役作家に課せられた懲罰のような気がしてならなかった。¹⁾

このような時期にあっても新人作家たちの優れた営みが皆無であつたわけでは決してなく、中島敦の諸作品などはその代表的なものであつた。この中島敦や田中英光

の登場について木村徳三は、へはじめ『文學界』に「古譚」が載つたとき（昭和十七年）、中国の故事に託して現代人の魂をゆさぶつてやまないその作風に、私はいつとき茫然とするほどの圧倒的な感銘を受けた。続いて「光と風と夢」「李陵」が発表されるにいたつてますます感服した。これほど強烈な感動を与えられた新人の小説は、戦前戦後にわたる私の編集者時代を通じても数えるほどしかない。「古譚」の少し前に『文學界』には、田中英光氏の、オリンピック選手の恋愛を描いて日本の近代小説ではまれに見る健康な青春小説である「オリンピックの果実」が発表されて、当時の私はこうした優秀な新人を発掘し得る『文學界』編集部の実力を大いに羨望したものである。²⁾と述懐している。

日米開戦時の 昭和十六年十二月の戦争勃発後、知識人の状況 『文藝』は例えば昭和十七年十月号の座談会「東亜文芸復興」(片岡鉄兵、谷川徹三など四名)、十八年一月号の座談会「戦争と作家」(陸軍報道部長、同報道部員、阿部知二、尾崎士郎など六名)、昭和十八年二月号の丹羽文雄・火野葦平による対談「決戦と文学」というように毎月のように対談・座談会を催し、掲載しているが、木村徳三によるとそれは単に読者への牽引策のみではなく、ましてや編集費の遣り繰りのためで

はなく、『臣道実践』体制下における文学者の発言をもとめて敢えてとった時宜的手段』であった。文芸雑誌も戦時色一色となり、昭和十八年三月号からは表紙に「撃ちてしまむ」のスローガンを刷り込むことを命じられ、しかも改造社と中央公論社の廃立が噂されて、木村徳三たちは戦々兢兢ながら、ただ自分たちの雑誌の存続を願って惰性的に仕事を続けるだけとなった。《それまでまかり通っていた超皇国主義者の保田与重郎氏の文章すらも、その思想の側面である審美主義のため危険視されるにいたって、文化は全くの空白状態に化してしまったのだった。》というのが木村徳三の述懐である。³

開戦後まもなく、中島健蔵から日米両国の科学の発達度の大きな差を示され、こんな国を相手にして勝てると思ふかと問われた時に、確かにそれはそうだと肯きながら木村徳三は、『しかし戦つた以上勝たなければならぬ』と思ったと言う。改造社の社内では、社長室の壁にアメリカ艦隊の全貌図が貼られ、戦果が発表される度に撃沈された戦艦を×印で消し、社長を中心に社員たちが拍手し歓声を挙げていたと言っているのである。一級の知識人たちの実態にしてからがそうであった。木村徳三は卒直に、『私がこういう愛国的感情に率直に酔えないまでも同調していたのは事実だった。それは、軍統制下の理不

尽に反発しながら、東洋の民族的、文化的解放という名目に、一種のロマンティズムを感じていることにもつながっていた。こういう矛盾した心境は、単に私だけでなく、文学者・文化人をも含めて一般ではなかったろうか。少なくとも開戦後一年間ぐらいいはそうだったはずである。』と述べている。確かに、醒めている部分に於いては軍国主義に反発しながらも、同時に一種のロマンティズムに支えられつつ悪い夢に同調していたというのが、当時の一級の知識人の偽らざる心情であったであろう。更に重要なことは、そのような雰囲気の中で、日本文学報国会の設立に続いて編集者たちの間にも「日本編集者会」が結成され、伝統的に野党色の濃い改造社の編集部内からは誰一人として積極的に参加するものがなかったにせよ、この会を冷視し切るのをためらわせるものがあつたことも疑えなかつたということである。木村徳三は自らも認めているように「自由主義的インテリ」であつて、『もしこの戦争が勝利に終つても、現在の皇軍ファシズムが更に強化されて、私たちのような自由主義的インテリの存在が許されるはずがない、また逆に敗戦となれば、恐らくは左翼革命が起つて私たちは抹殺されることになるかもしれない、どっちに転んでも、今後私たちの席は果たしてあり得るのだろうか、云々というよ



【文藝】(昭和18年1月号) 目次



【改造】(昭和17年4月号)



【改造】(昭和19年6月号)

(関大図書館所蔵)

うな会話を、互いに複雑な表情で交しあった」と回想する。

横浜事件と そのような木村徳三たち改造社社員の言論の封殺 暗い気分にも更に現実的に拍車をかけたのが、昭和十七年から十八、十九年にかけての細川事件とそれに続く、世に謂う「横浜事件」であった。まさに事件の近くにいた木村徳三の証言をそのまま引いておこう。

十七年四月号の『改造』がふた月にわたって連載された細川嘉六氏の評論「世界史の動向」のために発売禁止処分を受け、それとともに細川氏は検挙さ

れ、その責任で編集主任の大森直道さんと原稿担当者の相川博君が退社したのである。そして翌年五月、相川君と『改造』編集部の小野康人君が逮捕された。前年の夏細川氏の親睦会の記念写真に両君が写っていたからというので、細川氏の取調べに関する両君の逮捕だろうと私たちは聞かされていたが、これが後に「横浜事件」と称される大事件の発端だとは、夢にも思わなかった。ただなんとも言いようのない脅迫感に、編集の誰もが顔を曇らせるばかりであった。続いて十九年一月、同僚の青山鉞治、小林英三郎、若槻繁の三君が(同時に、上海に渡っていた大

森さんも)一挙に検挙されたのだが、そのときも、これが前の相川君たちと同じ事件に連なるものとは私たちは考え及ばなかったのである。が、中央公論社の編集者たちも同時に検挙されたと聞いて初めて、事のなみなみならぬ重大さを察知させられたのだった。騒然たる社内の空気の中で、それでも私は、これらの同僚たちが、過去の来歴はともかく、またインテリ編集者に共通の反戦思想の持主ではあっても、現実的に反戦運動を行っていたとは到底考えられず、見当もつかない恐怖に立ちすくんでいた。

この事件が、代表的な総合誌『改造』の休刊、更には改造社解散の前触れでもあった。《私(木村)が、この雑誌編集者三十数人が検挙投獄され起訴され、獄死者さえ出した大事件の全貌を知り得て驚愕したのは、敗戦後のことである。同じ社内でありながら当時全く輪郭すら知らなかったとは怪訝に思われるだろうが事実である。》との証言には驚かざるを得ないが、事実はその通りであったろう。『改造』ではなく『文藝』の編集者であったが故に木村は難を免れたのであろうと思われる。《今となっては私は、現在編集という職業に携わるすべての人びとに、例えば当事者の青山鉞治君(筆名・青山憲三)

の著作「横浜事件」や中村智子氏の「横浜事件の人びと」などを必ず一読してほしいと願うばかりである。当時のジャーナリストがおかれていた位置、国策に対して批判的な思想をもつ有能な編集者がなめた辛酸、そして国家権力が政策遂行のためにはどれだけ兇暴化するものか、をつぶさに知っておいてもらいたいからである。》と控え目な願望を木村徳三は述べているが、何も編集者に限定する必要はない。本誌前号でも森井暁関西大名誉教授が「横浜事件再審開始決定をめぐって」と題する論攷を寄せられているが、《被検挙の主体は『改造』『中央公論』『日本評論』などの総合雑誌編集者であったが、以上の総合雑誌は国をあげての戦争熱狂の風潮のなかで、わずかに理性的な立場を失わなかったほとんど唯一のマス・メディアだったからである。戦争に狂奔して、ジャーナリズムを「紙の弾丸」化しようとしていた軍官僚にとつてはこれらの存在は許せることではなく、四四年七月十日、横浜事件を口実として、半世紀の歴史をもつ中央公論社と改造社に解散を命じ、「理性と良心の最後のとりで」は、圧殺されたのであった。》(『世界大百科事典』)という横浜事件は、全ての人びとの知らなければならぬ思想言論弾圧事件である。二度とこのような事件を起こさせてはならない故にである。

黒田秀俊『昭和言論史への証言』は、《半世紀前後の長きにわたつて、日本知識層の支持をうけてきた中央公論、改造の両社は、戦時下の思想指導上許しがたいものがあるという一方的理由で、昭和十九（一九四四）年七月十日、情報局から「自発的廃業」という名の解散を申しわたされたのである。その直接のきっかけとなつたものが、「横浜事件」とよばれる世にもふしぎな物語であつた。この事件で、中央公論社関係としては新旧社員をあわせて八名が検挙され、改造社関係としては、おなじく七名が検挙された。検挙にあつた神奈川県特高課は、これらの人々が、編集活動を通じて、反戦、厭戦思想を、広範な左翼的啓蒙をおこない、日本共産党の再建をはかつたという筋書をつくりあげ、情報局はこれととりあげて解体の理由にした。⁶⁷と記した上で、《この事實は、もちろん、戦時中は闇から闇に葬られていたが、敗戦と同時に、軍閥暴政のなまましい証跡として国民の前にあきらかにされた。》⁶⁸として、昭和二十（一九四五）年十月九日付の「中央公論、改造、解体の実相」という三段抜きの見出しを掲げた朝日新聞の記事を紹介している。参考までに、以下にそれを掲げておく。《昨年六月、突如としてわが国の代表的総合雑誌として多年わが国思想界に指導的役割をにない、知識階級に愛読され

ていた『中央公論』『改造』の二社が当局の弾圧によつて解散の余儀なきにいたつたが、この裏面にはつぎのような奇怪なる弾圧事件が秘せられていた。／《泊事件》まず当局によつてデッチあげられたものは、泊事件である。昭和十七年八月、九月の『改造』に細川嘉六氏の『世界史の動向と日本』と題する論文が掲載されたが、これが情報局によつて共産主義の宣伝と指摘され、九月にいたつて前記掲載誌は発禁となり、筆者細川氏は同月十四日検挙された。／これよりさき、七月五日、細川氏が郷里富山県泊町の料亭に交友関係にある改造社の相川博、小野浩二（小野康人のあやまり——黒田）、中央公論社の木村亨、満鉄の西尾忠四郎（当時、細川氏は満鉄の嘱託であつた）外三氏を招いて一日の清遊を行つたが、当局はこの会合を共産党再建を議したものとし、前記論文の執筆、発表もその目的のためにここにおいて決定したるものとして、翌年五月右七氏を検挙した。／《昭和塾事件》一方日本の政治、経済を科学的に研究していた昭和塾を、当局はマルクス主義の研究団体なりとして十余名を検挙したが、このなかに中央公論記者の和田喜太郎氏がふくまれていた。なお、この事件は、同塾のバックに関係をもつものとして近衛勢力の打倒をねらつた政治的陰謀も企図されていた。これらの事件につづき、当

局は『中央公論』『改造』等の編集方針が左翼的であるとなし、かつ雑誌編集者の組織を通じて共産主義運動を展開せんとしたものと見て、その方に弾圧の手が伸び、十九年一月、元中央公論編集長小森田一記、同記者浅石晴世、改造編集長大森直道らの諸氏をはじめ、日本評論その他出版界、雑誌編集者等二十数名が検挙された。この一連の事件が、ついに中央公論、改造を解体せしめたのである。雑誌『改造』は昭和十九年六月号を、『中央公論』は同年七月号を、それぞれ最終号として共に幕を閉じた。

木村徳三が　そこに至るまでの間、改造社では『文藝』編集長に　昭和十九年三月に、『改造』を補う意味での新雑誌『時局雑誌』が創刊される運びとなり、小川五郎がそちらの担当者として『文藝』から転出し、その後任として木村徳三が『文藝』編集長に任命される。《山本社長にすれば片々たるパンフレットのようになった文芸雑誌にはほとんど関心も興味もなくなっていたのだらう》とは自身のその人事の理由についての木村徳三の後年の憶測であるが、文芸誌どころではなかったのは事実であったとしてもそれは謙遜というものである。《責任者になってから『文藝』を二、三冊出したであらうか、程なく改造社は解散を命ぜられ、同時に『文藝』

は河出書房に譲渡された。十二万円で売られたと聞いたが、さだかでない。(中略)細川事件以後、自己保身に汲々とした姿勢ばかりが目立つ山本社長に対して、多くの社員が少からずあきたらなさを感じていた(略)。今回の解散は当局の弾圧によるそれだから社員に退職金は出せないということを聞かされて、一抹の愛惜の念は霧散したのだった。編集部内は騒然とした。改造社という出版社への愛着は消し難く、万一改造社再建ともなれば馳せ参じることに吝かでない、しかしそれは山本実彦氏が社長でないという条件での話だ、と息巻くものもあり、それが編集部全員共通した気持であった。》

改造社解散直前の、つまり軍国主義ファシズムのピーク時の木村徳三の証言を次に掲げて、この項を終えよう。

主任になってすぐ、情報局から、各文芸雑誌の責任者と懇談がしたいと呼び出しがかかってきた。出向いてみると、数人の編集長を前にして早速中年の担当官が、今後の編集方針を質しかけた。はじめに、最年長の『新潮』の植崎勤氏が口をきったのだが、作家というものは自発的な意欲が湧かない限り執筆できないものであり、よい作品も生まれない、だから……と至極当然なことを述べはじめた。すると係

官はまだ榎崎さんの発言が終らないのに、それを遮って、君の考えは編集長としてあるまじき時勢を弁えないもので、個人主義思想以外の何物でもない、と荒げて述べたのである。(中略) 榎崎さんに向けられた罵詈雑言を耳にして、軍人でも刑事でもないのが、なぜこんなに威丈高に怒鳴るのかと憤慨に堪えなかったが、自分の番になったときの返答の持ち合わせがなくて内心では慌てていた。¹⁰⁾

編集者とし 木村徳三が改造社に入社したのは昭和四月から同九年四月までの間、後年代表的私小説作家の一人として揺るぎない地位を築くことになる上林暁(本名・徳広巖城)が改造社の編集部に入ったことを記さないわけには行かない。

上林暁は昭和二年東大英文科を卒業して改造社に入社、初め校閲部にいたが、間もなく『現代日本文学全集』の販売業務にも加わった。高橋英夫が寺田博編『時代を創った編集者101』(新書館・二〇〇三年八月)の「上林暁」の項に記しているように、改造社を興した山本実彦の二大事業は、社会主義論客を起用した雑誌『改造』を、デモクラシー唱導の『中央公論』と肩を並べる二大

雑誌にのし上げたことと、もう一つは所謂「円本時代」の幕を切って落としたことである。入社したばかりの上林もその全集販売合戦に加わったわけであるが、その頃の模様を自身のちに「青春自画像」(『別冊小説新潮』昭和二十六年一月)、「入社試験」(同上・昭和二十七年一月)などに描いている。彼は旧制五高(熊本)生の頃から既に将来作家となるための礎石にする気持ちで小説や戯曲を書いており、改造社が社員の執筆を禁止していたので上林暁のペンネームを使用していたという経緯もある。四月に入社し、校正や販売の業務を経て六月に『改造』編集部配属された。そして昭和八年には新たに発行された『文藝』の編集主任となったが、翌九年にはいよいよ文筆に専念するために退社の仕儀となる。高橋英夫は前掲書『時代を創った編集者101』の「上林暁」で、「急進的な『改造』は発禁の厄に遭うことが多かったから、その予防措置として編集部は伏字に苦勞した」と記し、伏字の範囲は不敬、反軍、反戦、平和、革命、私有財産の否定、姦通、猟奇、風俗壊乱その他に及んだ、と言及している。苦勞も空しく発禁になると、書店から回収した雑誌を一冊一冊社員総出で切り取っていく。板切れをページに当てがい、ペリペリと引き裂く。それが積むと「削除済」のゴム判を表紙に捺してトラックに積

み、もとの書店を一軒一軒まわって返却する。肌の擦りむけるような荒作業であったという。後年、高見順との対談「作家の青春」(『文藝』昭和三十一年十二月)で上林暁自身が、「改造」が中里介石の「夢殿」(昭和二年五月号から掲載——吉田)で発禁になったのですよ。聖徳太子の一族が蘇我の一派に殺される、というのがいけなくて、発禁になって、編集部が入れ替えになって、ほくと水島治男とが「改造」に廻ったんです。」と語ったり、「『文藝』は第二号に番匠谷英一の戯曲「源氏物語」を載せて、これが発禁すれすれ。これでふえたですわ。一万になったですよ。『新潮』なんか三千そこそこだったでしょう。それで山本さんが十円くれてね、へこれで卵でも吸いたまえて。」と語っていることから、昭和の初頭の頃でさえ表現の自由が如何に奪われていたかが窺えよう。

因みに、高見順とのこの対談で上林暁が当時の原稿料について語っている部分を次に掲げておく。

(『文藝』の)原稿料は最高三円だったですよ。それはね、『改造』の小説の最低なんですよ。『改造』で初めて新人を採る時に三円だった。しかしその時分『新潮』が一円五十銭か二円だったから、三円と

いったら、いいわけですよ。だけでも、『文藝』は『改造』のようにたくさん出せない。それで正宗白鳥でも三円ですわ。里見さんは、三円じゃとても書けんから、きみの所へ寄附する、というのでね、六枚の随筆を只で書いてさったですよ。

(四)

『人間』の創 シュツパンジギョウニサンカクサレ刊と鎌倉文庫 タシ」オイデコフ」カワバタヤスナリ
上京を促す川端康成からの一通の電報を木村徳三が受け取ったのは、昭和二十年九月十六日、敗戦の日からひと月後のことである。当時彼は滋賀県の片田舎に疎開していたのであるが、出版事業の内容も分からぬまま、交際事情の極端に悪いさ中、その電報に促されて取るものも取り敢えず鎌倉の川端家に赴いたという。待ち受けていたのは「人間」創刊の企画であった。

文芸雑誌「人間」とその母体となった「鎌倉文庫」とについて簡単にスケッチしておく。

戦争の末期、久米正雄、川端康成、小林秀雄、高見順、中山義秀、石塚友二ら鎌倉在住の作家(世に鎌倉文士と呼ぶ)たちが生活の手段として、各自の蔵書を持ち寄り

て鎌倉文庫という名の貸本屋を鎌倉八幡宮前通りに開き、これが当たった。相次ぐ空襲による未曾有の書籍仏底の世に彼らの蔵書公開はまことに時宜を得た所業と覚しく、読書階層に歓迎されて商売繁昌と相成った。木村徳三によると、更にこの貸本屋は執筆の注文が激減して生活不安に直面した文士たちにとって、食糧入手を主とした一種の消費組合組織を図る事務所の役割をも持っていたらしい。この貸本屋鎌倉文庫が、敗戦直後の昭和二十年九月、出版社鎌倉文庫として新しく発足した。木村徳三に対して川端康成が説明したその経緯というのは、次のようなものであった。敗戦間もない一日、この貸本屋鎌倉文庫の前を通りかかった或る紙業会社の社長が、立ち働く文士たちの姿に感じ入って、こちらには終戦で残った紙と資本がある、これを提供して貴兄らと共同事業をやりたいと考えるものだろうか……といった申し入れがあったというのである。すぐその紙業側と文士たちが会見したところ、たちまち話は出版会社鎌倉文庫の設立ということにまで発展し、新会社の社長には久米正雄、役員に川端、高見、中山らが就任し、紙業（大同製紙）側から営業・経理担当の役員が加わるということになった。資本金は三百万円で、文士側の株主には他に大佛次郎、吉屋信子らも加わり、文字通り「文士の商法」と呼ぶべ

きものではあった。「日本近代文学大事典 第五巻 新聞・雑誌」の「人間」の項目には、（鎌倉文庫の）仕事の一つとして、大正期に里見淳、久米正雄、吉井勇、田中純、直木三十五（当時本名植村宗一）らの編集で発刊した「人間」（大八〇一）の誌名を踏襲して創刊したものである。創刊号の表紙は国画会の須田國太郎による、白地にセピアのたくましい裸の男女の後ろ向き立像を描いたデッサンの画期的なもので、目次の大要は西谷啓治「国民文化とヒューマニズム」、福原麟太郎「自由主義」、中村光夫「二葉亭の未発表書簡」、宇野浩二「高浜虚子」、永井荷風「谷崎潤一郎氏へ寄する手紙」、正宗白鳥「新」に惹かれて、創作欄は川端康成「女の手」、島木健作「赤蛙」（遺稿）、林芙美子「吹雪」、里見淳「姥捨」と絢爛豪華なもので、書店の店頭で長蛇の列ができるほどの、紙に飢えた読者の渴望に十分こたえただきばえであった。（以下略）（巖谷大四）と記されている。

木村徳三が いざ鎌倉と馳せ参じた木村徳三に「人間」編集長に 雑誌発刊の計画を説明した上で川端康成は、「その編集を、あなたやつてくれませんか」と言い、どんな雑誌かとの問いに、「それはあなたが決めることです」と答えた。そして、雑誌の名前だけは「人

間」と決まっていると伝えたのである。へ「ああ、それはあの、昔久米さんや里見さんがやってらした同人雑誌の……」／二十年も昔の小学生時代に見た『人間』の表紙が、私の目の底から不意に浮かび上がってきた。姉の机の上にあったそれは、有島生馬、画伯の裸女の素描に、左肩に久米正雄、里見淳、田中純、吉井勇の同人名が刷り込まれてあった……。／「そうです。あなた知ってましたか。新しい『人間』はあなたの好きなように編集してください」／返す言葉はなかった。編集者にとって、一つの雑誌の編集を無条件に任せようとは！ まさに編集者冥利に尽きるというものである。感激が身内のすみずみにまで熱くひろがっていった……。とその時の感動を木村徳三は伝えている。

十五年に及ぶ長い侵略戦争が敗戦で終わり、特にその末期とも呼ぶべき十年間の厳しい軍国主義ファシズム下で表現の自由を奪われていた編集者・木村徳三にすれば、新しい条件下で雑誌を作ることができると言うことはもうそれだけで何物にも換え難い歓びであったろう。因みにわたしの言う「末期とも呼ぶべき十年間」について、小松伸六の言を次に引いておく。《十一年二月二十六日のいわゆる「二・二六事件」の軍人蜂起はこうした（昭和六年の所謂満州事変から同十年の政党政治の凋落に至

る——吉田）危機の最頂点を示し、この事件を界として完全に世界観は帝国主義戦争へと強いられ、侵略戦争は始まり、文学をふくめてあらゆるものはそれらの奴隷と化してゆき、事変の長期化と拡大、軍閥の政權把握から軍国主義化は急テンポにすすみ、十六年十二月八日の太平洋戦争の勃発で帝国主義戦争は決定的段階に突入し、以後完全に悲劇的相貌をおびて、ついに自らほった墓穴に自らを投じ、完全なる敗戦、八・一五の革命となった。》

自分に任せられた新しい雑誌を、どのような雑誌にすればよいのか、木村徳三にはそれは自ずと決まっていた。《私には文芸雑誌以外にできるはずがないし、興味もなかった。とすれば、私はあらためて編集方針に思いをこらしたり考えあぐねることはほとんどなかった。過去六年間にわたる『文藝』編集の経験を通じて、いつしか私の脳裡には望ましい文芸雑誌のヴィジョンが出来上がっていたからだ。それは基本的には『文藝』の小川五郎氏から踏襲したものであり、その上に私の志向を加味し、結実させることなのである》と述べた上で、それは《文壇的な文芸雑誌でなく、文芸的総合雑誌ともいべき雑誌》であり、《一般総合雑誌から政治、経済、法律、科学の面を落して、文学を中心に思想、芸術の域を

総合した新しい雑誌——つまり新聞の文化・学芸欄の結晶に近い一種の文化雑誌註を作りたかつたのだと回想する。文士の経営する出版社が非文壇志向の文芸誌を刊行することの矛盾は当然意識の中にあつた。《久米・川端・高見・中山という錚々たる文壇人が経営する出版社から発刊する雑誌が、その編集方針として非文壇的方向をとるといふのも、非常識の譏りは免れないかもしれないし、多分に文壇的文壇人だつた久米社長などは内心不満だつたのではないかと察せられるのだが、当時の私にはそんな氣遣いの余裕はなかつた。また、新生日本の文芸読者の要求に対していかに応えるべきか、それがどれだけアピールするか、といった営業雑誌としての配慮にもこだわることはなかつた。》という回想からも、時期を得たとの意気込みが十分に窺えよう。

戦後スター 《★「人間」創刊号をおくる!》から
卜時の意欲 始まる「創刊号後記」は木村徳三の当時抱いていた文芸雑誌に対する抱負を語つて余りあるもの故に、その一部分を以下に掲げておく。

★あの敗戦の晩夏に、見わたすかぎりの慘憺たる焦土を前にして、幾たびか、絶望なすところなく佇みつくさなかつたひとがあつたらうか。しかしまた、

荒廢の風景に点綴された菜園の鮮かな緑のいろに、涙の出るほどの感動を味はなかつたひとがあつたらうか。あの緑、自然の中のごにでもある謂はば平凡なそれだけに永遠のその色が、かくまでいぢらしく、勁く、更に氣高く、心に沁みたことは嘗てなかつた。吾々はその緑の色に再建日本の表象を眺みとつたのだ。そしてそれを育て燦然たらしめるこやし(傍点ママ)としての文学の役割の重大さに烈しく思ひ及んだのである。「人間」はあくまでこの文学の役割が十全に果されんがための最も充実せる場でありたい。

★現在の混沌を感傷的に言ひ立てその責任を狂熱的に追求することよりも、吾々はまづ敗戦国日本といふ悲愴な現実をめぐつて、謙虚に反省すべきではないか。さやうな感傷と狂熱こそが惨敗の大きな原因ではなかつたか。文学界に於てもまた嚴しい自己批判がなされねばならないであらう。感傷と狂熱とを高い叡知と正しい表現へ導くべき文学者のこのころとその發言の、この国に於ける社会的な非力さについて。在来の文学作品の思想性・社会性の貧困、つまり世界性の稀薄について。眞の国民文学もこれらの課題の充足によつて確立されるに違ひない(傍点

——吉田)。今や日本文学の新しいよみがへりの朝にあたり、この方向に多くの文学的情熱が傾けられねばならない。しかもこれに關しては思想家の努力にも俟たねばならぬであらう。

「人間」はこの新なる日本文学の発展に積極的に寄与したい。(以下略)

「人間」は恒に新人を迎へる扉を大きく開けひろげたい。(略)新しい時代は新しい文学者を喚んでゐる。(略)しかし所謂新人募集などいふ在來のジャーナリズムの空虚な笛を吹いて新人登場を、敢えて性急にせき立てない。若い文学精神の自然な燃焼と噴出を絶えず待ち設けたいのである。」と編集後記に記されていることを落としてはなるまい。

アメリカ占領 「人間」創刊号についての木村徳三の領軍の検閲 回想の中に、アメリカ軍による検閲に關する貴重な証言が含まれている。

創刊号の校了刷りを内幸町のNHK会館にあったGHQ・CIE(進駐軍文化情報局)に提出し、二、三日後、検閲が終わったとの連絡を受けてゲラ刷りを受け取りに出向いたところ、軍服の二世らしい若い検閲係員が二つの原稿の発表は許されないと云う。一つは今日出海の原

稿で、報道班員としてフィリッピンに従軍し敗戦直前に戦死した里村欣三を追悼した文であったが、文中「敵軍」とあるのが戦争の終わった現在では不当であるとのことである。もう一つは小宮豊隆の「印刷されなかつた原稿」という一文で、小宮が戦時中に執筆した原稿の中、日の目を見なかつた五篇の感想文を集めたものであるが、その中の一篇が今度は米軍の検閲に引つかかつたわけである。これにも先程の今のケースと同様「敵軍」の使用が指摘されたが、それよりも全文がまかりならぬと言う。文中には東京空襲の情況が描かれると共に、米軍の日本本土上陸の予想について軍部に対する痛烈な批判が詳しく書き綴られたものであつた。小宮はそれを朝日新聞に寄せたが、編集方針に添わないとして返却されたというもので、無論戦中に書かれたものである。当時の新聞では、こういう文章は戦時下の国民の士気を損ねるものであるという判断であり、何よりも軍部批判は最大のタブーであつたからであらう。小宮のその文章の末尾には、「私の五つの原稿は、その点で、一面、検閲の横暴によつて惹起された編集者の恠えの、記念ともする事が出来るものである」と書かれてあつたが、それが今度は逆に、戦中の朝日新聞の折りのとはほほ同じ理由によつて占領軍が発表を許さないのである。(つまり、米軍にすれば自

軍のすさまじい東京空襲の光景は葬りたいことであろうし、日本上陸作戦云々は許し難かったに違いない。敵味方いずれの側にしても軍部の意識というものは共通なのであろう。」というのが木村徳三の感想である。印刷工程では既に紙型が鉛版になっていて、どうにも止むを得ず、今日出海の方は数方所の語句を削って空白にし、小宮豊隆のものについてはその三ページ分を鉛版をつぶして読めなくするという応急処置を施した上そのまま印刷にかけた。

『人間』創刊号は敗戦の年の十二月二十日発行である。総ページ、二四〇ページ。定価は四円五十銭で、部数は二万五〇〇〇部であった。創刊号の前掲のトラブルにからんで木村徳三は、『進駐軍(傍点・ママ)』という名称にまやかされて、占領軍下(傍点・ママ)にあるという現実の受け止め方をなおざりにしていたことは否めなかつた』とした上で、『軍国日本の桎梏を脱した解放感と喜びのあまり、国民の権利として与えられた思想の自由、言論の自由、表現の自由を鵜呑みにしてしまっていた譏りは免れない。つまり、占領軍下にあるという現実を失念していた一種の甘えは、検閲で冷水を浴せかけられたのだった。その報いは靦面にきた。』と現在から考えても重要な反省を伴つての指摘をしている。長年にわたつ

て非合法化を強いられてきた日本共産党が占領軍をその一面を強調して解放軍と規定していたのだから、一編集者のその思い込みは決して責められるものではなからう。故なしどはしない性質のものであった。しかし看過できないのは、その続きの出来事である。CIEに納本した翌日、呼び出しを受けた木村徳三が出頭すると、今度は中年の婦人将校が指導と称し、「あなたは検閲の結果を理解していなかった。三つのミスを犯している」と以下の三点を指摘した。一つは、今日出海の文章の中で削除しなければならぬ語句を空字のままにしていること。一つは、小宮豊隆の文章を削除せずに誌面を黒くつぶしてあるに過ぎないこと。更にもう一つは、これは最も重要なことなのだが、以上の二つを通じて事前検閲のあとが歴然と残っている、すなわち検閲が行なわれたことが完全に読者にわかるということ、の三点である。米占領軍の検閲のポイントは、検閲の行われたことが読者には全く気付かれないようにすることにあつた。周知のように、戦前の日本には出版社側の自主規制であるところの伏字というものがあつた。例の「×××」である。このままでは検閲によつて発売禁止となることを免れまいと考えられる表現について、出版社の側が事前にその表現(文章或いは語句)を削除し、その削除部分にその字数

に当たるだけの×印を当てておく印刷の方法である。形の上ではあくまでも出版する側の自主規制であるが、実質的には思想・表現に対する国家権力の弾圧・抑制であったことは言うを俟たない。ただ伏字の場合、伏字の存在そのものは読む者にとって一日瞭然のものであった。その点が占領下の米軍による検閲とは、前掲の『人間』創刊号のそれに見られる如く、全く異なっていたのである。わたしは現在に於いてもアメリカの民主主義を本質的な民主主義とは認識しておらず、政治（特に国際政治）の面ではむしろ民主主義とはほど遠いものと考えているが、敗戦後の検閲に於いても民主主義と表面上見せかける巧妙なものであったと言うの他はない。日本の軍国主義の方がその点、むき出しであるだけ正直と言えば正直と言い得ようか。米占領軍検閲の実例を一つ挙げる。

中野重治「五勺の酒」 中野重治「五勺の酒」〔展望〕

「酒」に巧妙な削除 一九四七年一月号）についてのものである。一九七七年六月刊・筑摩書房『中野重治全集第三卷』の「解題」で松下裕が「五勺の酒」の項に《第一二ページの伏字、「あれが議会に出た朝、それとも前日だったか、あの下書きは日本人が書いたものだと連合軍総司令部が発表して新聞に出た。日本の憲法を日本人がつくるのにその下書きは日本人が書いたのだと外国

人からわざわざことわって発表してもらわねばならぬほどなんと恥ざらしの自国政府を日本国民が黙認してることだろう。》は、占領軍の検閲によって削除されたものである。伏字はその個所も字数も明示せず、ただ文章の前後をつなぐ方法によっている。この伏字は単行本でも同様で、その後の各種刊本もみなこれを引ききついでいるが、この全集ではじめて原稿によって復元された。《略》と書いているが、その通り、それまでに活字化された「五勺の酒」の全ては旧版全集のものを含めて米占領軍によって巧妙に伏字にされた部分をそのままにした不完全なものを踏襲しており、この七七年版の全集第三卷所収の「五勺の酒」が初めて原稿通りのものとなったわけである。無論わたしなどもそうとは知らずに読んでいた。この七七年六月刊行の『中野重治全集 第三卷』巻末の「著者うしろ書 戦後最初の奇妙な十年間」の中で作者・中野重治自身がその間の事実を初めて明らかにしており、重要な証言でもある故に、やや長くなるが以下に引いておく。

（略）そしてそのなかで、「日本の敗戦による終戦がそこにあり、検閲の廃止などい、うことがあり……」のこの「検閲」のために私たちは苦勞しなけ



『新日本文学』創刊準備号
(昭和21年1月3日刊)



『新日本文学』創刊号
(昭和21年3月1日刊)



【本誌の出来るまで 中野 重冶】

(関大図書館所蔵)

ればならなかった。何よりも……と私は言いたい。／
私は、雑誌『新日本文学』の創刊、雑誌『民衆の旗』の創刊のためにどこかの建物へ出かけて行ったときのことを思い出す。そこにたくさんの日本人が「許可」を受けに来ていた。順番を待っている私に、彼らが、相手の外国人役人にしきりに陳弁しているのが見えもし聞えもしした。彼らは、出そうとしている雑誌類の編集主旨、過去にいかがわしい経歴のな
いことなどをしきりに述べたてていたが、相手役人の一人が、その日本人よりもずっと達者な日本語でべらべらまくしたてるのを内心おどろいて聞いてい

ねばならなかった。青いろの着物を着て、青いろの指輪をして、爪を青いろに染めた女の役人などもそこにはいた。むろん『新日本文学』や『民衆の旗』創刊の許可はその場で取れた。しかし「検閲の廃止などということがあり……」の「検閲」のためにこそ、その乱暴で陰險なやり方のためにこそたちまち私たちは苦しめられねばならなくなった。「タテマエとホンネ」という言葉がその後出てきたが、ホンネはここで実力、それもてきぱきとしたその運びそのものということでそれはあつたろう。それは日本の、特に戦時の検閲の上を行くものでもあつた。それは

伏字をさえ許さなかつた。「ここ何行削除」と入れることも許さなかつた。私の戦後第一作といつていい「五勺の酒」がここにはいるが、新しい憲法が出来て、天皇が出てきて民衆に顔を見せるところがある。そこにこう印刷されているところがある。／「……じつさい憲法でたくさんのことが教えられねばならぬのだ。そしてそれを、なぜ共産主義者がまじ感じて、そして国民に、訴えぬだろう。／この途中、短い二つの文章、「……ならぬのだ。」と「そしてそれを……」とのあいだにつきぎの文章のあったのが削られてそのままくつつけられていた。／「あれが議会に出た朝、それとも前の日だったか、あの下書きは日本人が書いたものだ」と連合軍総司令部が発表して新聞に出た。日本の憲法を日本人がつくるのにその下書きは日本人が書いたのだと外国人からわざわざことわって発表してもらわねばならぬほどなんと恥さらしの自国政府を日本国民が黙認してることだろう。」／これだけの文句が削られて、削られた跡がわからぬように上下くつつけて発表される。そしてこの「実力」が、「そしてそれを、なぜ共産主義者がまじ感じて、そして国民に、訴えぬだろう。」と問われた共産主義者の国民への訴えそのも

のに輪をかけてかぶさって行く。／「五勺の酒」の発表は一九四七年一月号の『展望』でだったが、その一月末に私は「現段階における中国文学の方向」のこと」というものを書いた。日本に伝えられた毛沢東文藝講話の紹介文で、それを私は『前衛』のために書いて「全文削除」を受けた。私の場合などは小さいと言つていい。また部分的なものと言つていい。四五年から四六年にはいつてきて、検閲の暴力は非道さを奔騰させて行つた。いつごろからと調べて言うことはここでできないが、当時ひろく、レーニン、スターリン、毛沢東などの翻訳が非常に困難になつていたこと、共産主義運動関係の議事録類が「党内参考資料」といった形でわずかに配布されねばならなかつたことなどを挙げておけばいい。こういう検閲状態がそのまま直線で結びつくわけではないが、あの時期の日本文学に陰に陽に強くひびいていたことを事実として私は疑わぬ。

アメリカ占領軍による検閲の巧妙なことは、繰り返して言うが重要な部分を削除させておいてしかも「削られた跡がわからぬように」している点にある。検閲をするぞ！と国民を震え上がらせるような威圧的な力を示す

検閲ではなく、中野重治の言う通り、《それは日本の、特に戦時の検閲の上を行くものでもあった。それは伏字をさえ許さなかった。」「ここ何行削除」と入れることも許さなかった。》という、読む者に気づかせないだけに厳しい本質的な恐ろしさを持つものであった。

『人間』創刊号の表紙絵は須田國太郎の描いた、若い男女が手を後ろに回して並び立つ裸像で、木村徳三にはエデンの園を追われたアダムとイブの姿と受け取れたものであったが、検閲担当の米軍婦人将校はこの絵について、「これは囚われ人の姿ではないか。現在の日本人は決して囚人ではない。連合軍によって解放された人民でなければならぬ」とのクレームをつけた。人間そのものの姿で、雑誌『人間』の表紙絵としてこれ程相応しいものは滅多にあるものではないと小躍りしていた木村徳三は、《これを両手を背後に縛られた敗国人の姿として現在の日本人を表現するものだとは、かんぐりもはなはだしい、言いがかりというものだ。》と抵抗して譲らなかつたという。この表紙絵は半年間続いた。

このようなCIEの叱責は、苦勞の末の創刊号発刊の喜びや、発刊と同時に忽ち売り切れとなり、リュックを背負った本屋さんが直接購入に詰めかけるといふ喜びに水を差された思いで、不愉快には相違なかつたが、同時

にそれは敗戦後の一連の有頂天のほとぼりを冷めさせる動機を与えるものであったことも疑えなかつた。《とにかく占領軍政下(傍点・ママ)で雑誌編集の仕事をしてゐるのだ。だからわれわれにはその自覚とそれにとまなう緊張が不可欠なわけで、その側面では元と変らないと思えばいい……こういう懽然たる思い》で以後の編集業務に臨んだという。

(注)

1・6・9・10 木村徳三「改造社解散前後」(『文芸編集者』その登音)

7・8 黒田秀俊「いわゆる『横浜事件』の全貌」

(『昭和言論史への証言』弘文堂・昭和四十一年七月二十五日刊)

11・13・14 木村徳三「『人間』創刊」(『文芸編集者』その登音)

12 小松伸六「第九講 戦争文学の展望」(著者代表・荒正人『昭和文学十二講』改造社・昭和二十五年十二月刊)

15 『中野重治全集』第三卷 作者あとがき(筑摩書房・一九六一年八月刊)の中で、「この十年間は、

現代日本文学史の上での大転換の十年間でもあった。日本の敗戦による終戦がそこにあり、検閲の廃止などということがあり、大戦と軍国主義との経験の大きな噴出があり、生活と文学とをこきまぜて日本人社会生活の基本的変動がそこにあつた。なによりも、国と人民とが他から占領されているという新しい事実があつた。

それまで文学となることのできなかつた政治批判が文学として生れ、やはりそれまで文学となることのできなかつた性生活の認識が文学として生れてきた。(中略)要するに、国と人民とが他から占領されているという事実のもとで、過去に不可能だつた政治批判が文学として生れてきたという日本の特殊性の弱さの反映ということが見えてくる気がする。(以下略)などと書いたことを指す。

(よしだ　ながひろ・文学部教授)

小説

モノフォビア

窓越しにその男の影が重なった。それが自分なのか、男なのかと自問し、ある種の怖懼ふくに襲われる。ゴウ、と音を立ててすれ違った電車が、影を壊して遠ざかった。間もなくして再び映った男の顔が、にやにやと嗤うのを見た。

なぜ拒まないのかと男は訝しみつつも、思わぬ幸運が訪れたことに喜悅の笑みを浮かべているのだろう。その手がさらに下着へと侵入すると、腿の辺りに熱い肉を押しつけられるのを感じた。一瞬遅れて嫌悪が背中を走った。電車が止まるのを待って、突き飛ばすように男を拒むと、人込みを押し分けて降りた。振り返らずに、改札を抜けた。

月が無い。

どこかの悪童が壊したまま付け替えられていない街灯の下を通った時、ようやくそれに気付いた。風が熱い頬を冷ましてゆく。歩く感覚は摺れないのに、陰部に残る火照った違和感だけがぐりぐりと植え付けられた。窓越しに見た男の醜穢しつぱいな笑みが脳裏に甦り、再び嫌悪が走るが、ふとそこに言い知れぬ優越すら感じている自分がいることに気付く。どんな形であれ、求められるということの快感は一瞬私を幸福にした。

アパートへ着くと、鞆を放り出してベッドで俯せになった。肉厚な男の手の体温を思い出しながら下着に手を入れてみると、粘つく液が指にからんだ。

林 田 ふくみ

……今日、来れる？

メールを打つと、一時間ほどして北条からの返信があった。

……泊まれないけど、行けるよ。仕事が終わったら連絡するから。

ただそれだけの事で、心が落ち着いていった。たとえそれが誰であっても、人と会うことで、その実私はその度に私を意識した。

北条は手土産に缶ビールとチューハイを持ってやってきた。何の為かわからぬ乾杯をして、チューハイに口を付ける。しばらく飲むうちに、酒に弱い私は、しだいに口が軽くなっていった。

「……私ね、決めたわ。サークル辞めるわ。もう耐えられないもの。」

「ええ？ ……まあ、居心地が悪いのはわかるけどなあ。」

「もう決めたの。もういいのよ。」

北条は同じサークルの先輩だった。元々サークル内でも仲は良かったが、一年ほど前偶然電車の中で再会したのをきっかけに、急速に親しくなっていた。

「あいつも、なんで別れようなんて言い出したんだろ

うな。他に好きな人でも出来たのか？」

「そういうんじゃないと思うけど。私も舞い上がってたから。自分の価値観押しつけすぎたところもあったしね。」

同じサークルの佑介とは別れてまだ間がない。実感もない。ただ、この頃は佑介を、横顔ばかりでしか見ていないことを思い当たる。

「慰めて。」

甘えるように北条に撓垂れかかると、缶ビールを脇に置いて私を抱き締めた。真綿を抱くように優しく髪を撫でる。

「ねえ、もつと。痛いぐらい抱いて。離さないで。」

……わかった。北条は眩き、冗談ばく体中で私を締め付けた。そして私の体を抱き上げベッドに放り投げると、ネクタイを剥ぎ取って私の上に覆い被さった。激しく唇を吸われ、口の周りに唾液が溢れた。

「レイプして。いいのよ、思うまま犯してくれていいの。」

北条は破くように私の服を剥ぎ、荒々しく乳房を揉み拉いた。淡い痛みが胸に響く。すぐにそれは快楽へと変わった。北条のズボンをずらすと、下着の中で陰茎が熱くそそり立っていた。北条は下着を脱ぐと、獣のように

私の髪を掴み、口に含ませた。咽せそうになって一旦逃れると、北条は思いかげず私の頬を張った。一瞬の恐怖は、やはり快樂への序章となって私を刺激した。

……もつと。もつと打って。

……痛くない？

……いいの。この痛みが、いいの。

さらに二、三発頬を張られると、北条は、欲望のままに私の陰部を唾液で湿らせ、やがて挿入した。

後ろから挿入した時、北条は何度も背や尻を手で打った。刺すような痛みは苦痛などではなく、皆快樂への序章となつて私には感じられた。この痛みが、私の頭を空白にするのだ。私の肉を、思考回路を、満たしてしまうのだ。孤独という文字を私の頭から排除してしまうのだ。それが一時的なものであるにしろ。

荒い吐息とともに北条は私の上に崩れ落ちた。目が合うと、どうだった、と苦笑した。最高よ、もう離れられないわ。視界が白くなり、涙が滲んでいるのに気付いたが、北条に見られぬように寝返りを打った。

部長にはすでにメールをしておいたため、メンバーの何人かはもう知っている人もいるかもしれない。通い慣れたはずの部室のドアを開けるのが、怖かった。ドアに

触れようとした時、ちょうど部屋から部長が出てきた。私の顔を見て、ああ、と声を出したときり何を話せばいいものかわからず互いに沈黙し合った。

「残念だったけど、まあ、自分で決めたことなら仕方ないね。」

結局在り来りなやりとりに終始した。部室へ荷物を取りに入ると、数人のメンバーが振り返った。事情は知っているらしい、こしょこしょと囁き合う声が耳を刺した。

女は嫌いだ。同性でありながら、いや同性であるからこそなのか、接し方が時々わからなくなる。何を考えているのか、戸惑う。比べて男の方がよほど理解しうる生き物に思える。その大半が女の前ではよく似た反応を示す。部室に佑介がいなかったことは何よりの救いかもしれなかった。女ばかりの部室なら、未練など残りようがなかった。無造作に荷物を取り上げ、積み重なったジャージ類の中から自分の物を選び分ける。背中に突き刺すような好奇と軽侮の視線を感じたが、あえて気にならぬ振りをし、今までありがとうございました、と部屋を出る前にありふれた挨拶を残すために振り返った。残念ね、今までおつかれ、口先だけの社交辞令を笑顔で受け止めながら、早々と部屋を出た。

思い出はさまざま、浮かんで消えてゆくが、意識し

て佑介との記憶だけは闇に消散させてしまおうとした。

全てに嫌悪が付きまとった。役者志望丸出しの、やたらはきはきとしゃべる女たちを嫌悪した。厄介事を一人で背負い込んだような顔をした恩着せがましい部長を嫌悪した。集合した時に一人ずつ新人を品定めする男たちを嫌悪した。それを意識して顔を作る新人たちを嫌悪した。何より嫌悪すべきは、集団からとづくに食み出していることに気付かぬ振りをして、右往左往し続けた自分自身だ。佑介との恋愛が、あるいは集団との繋がり懸け橋にはならぬかと願っていたのだが、集団に馴染めないことが反対に佑介との関係に影を落としたのもまた事実だった。

肉の繋がりが心の繋がりと信じてきた。セックスが私と佑介とを近付けるはずだった。体を許し続けた一年が、あまりにも虚しい。

授業後、アパートへ戻ると、アルバイトへ行く用意を始めた。スナックでのアルバイトは、客と接する時間が短い分、化粧や髪に時間がかかる。ゆとりを持って二時間かけて身仕度を整え、電車で店へと向かった。

ドアを開けた途端、ママの発狂したような笑声が耳に飛び込んだ。白石がもう店に来てママを相手に酒を飲ん

でいた。

「おはよう、和泉ちゃん。白石さんがお待ちかねよ。」
ママが冗談めかして言うと、白石はさも愉快そうに笑った。

「そうさ。僕はこのおほこちゃんのファンだからね。」

「あら、お世辞言っても何も出ませんよ。ハハハ！」

「いつまで経っても和泉ちゃんは、おほこのイメージが消えないのよね。まあ、白石さんみたいにそれが気に入る人も少なくないけど。」

「そうそう。この子はそれだからいいんだよ。」

この品定めの視線にはいい加減うんざりするが、誉められるのは悪い気はしない。

三人で飲むうちに、マドカさんが松野と同伴して出勤してきた。店はようやく活気付き時折ママの発狂に包まれた。平日は客も少なく、今日も馴染み客はあと二、三人も来たら良いほうだろう。

十分ほどして、馬渡が一人でやってきた。馬渡は若くして、といっても四十手前の歳なのだが、食品会社のオーナーだそうで、金払いもいい。少し太った体に、笑顔の耐えない性格が好感を与えている。来るのは一月に一度か二度ほどだが、来る度に冗談めかして私を誘う。こういう訳か私を気に入ってくれたらしく、他のスタッ

フが付いても私と代われと文句を言うのだそうだ。馬渡が来た時は、暗黙の了解で私が相手に付くことになっている。

お久しぶりです、と微笑みながら声をかけると、途端に馬渡は緊張した笑みを浮かべた。飲むうちに緊張も溶け、馬渡は次第に大胆になる。手を出して、と私の手を取ると、甲を撫で摩りながら、やっぱ若い子はいいいね、ともう何度も聞かされた言葉を吐く。ママは商売道具に傷を付けられぬかと、時折私と馬渡との会話に割り込み、馬渡の付け入る隙をこっそりと砕く。

馬渡が私の手の甲に唇を付けたのを見たママは、堪り兼ねたか、今日はもう上がっていいよ、と私に声をかけた。はあい、と馬渡を傷付けぬよう何気なく手を引つ込めると、そそくさと帰る支度をした。じゃあ俺も帰るかな、と馬渡が立ち上がるのを見、これはまずいことになった、と内心舌打ちした。

和泉ちゃん、と後ろから声をかけられ、振り返るとやはり馬渡だった。飲み直そうよ、いつもの笑顔で手を取られると、拒みづらくなり、一杯だけ、と断って付き合うことにした。

バーの片隅で乾杯しながら、このまま飲み続けければ終電が無くなるまで付き合ってしまうことはわかっていた。

それでも誉められ、誘われ、媚びられることは、女として最上の幸福なのだと思じて疑わない自分があり、その幸福にもう少し、もう少しだけ、身を浸らせたかった。

終電が無くなる時間だと言いつせにそのまま、飲み続けた。店を出たのはさらにそれから三十分ほど経ってからのだった。誘われるままにホテルへ入り、酒の勢いも手伝ってか至極当然のように体を合わせた。煙草臭い腐った肉が私に携垂れかかり、体中を穢されてゆく。自己嫌悪に陥る隙もなく馬渡の体の一部が私を掻き乱した。

眠れずに暗闇の中、馬渡の軀を聞きながら天井を見つめようとしたり。そして結局、この隣にいるのが馬渡であろうが北条であろうが、佑介であろうが、私を肉と見做して欲情する男という生物であることに何ら変わりはないのだと実感した。ある種の不貞腐れとともに、それなら私も肉としての男を愛そうとするのだった。

正門を過ぎた辺りで、聞き覚えのある声に呼び止められた。佑介だった。

「サークル止めたって聞いたけど。」

「気まずそうに、私の顔を観察している。」

「そうよ。それがどうしたの。」

「俺のせいかな。」

「自意識過剰なんじゃない？ 就職の事考えてそろそろ潮時だと思っただけよ。自惚れないで。」

言い捨てて去るが、佑介が今どんな顔で私を見送っているのか、手に取るようにわかつていた。

いつも、そう。自分を求める者は拒まず、自分から去ってゆく者は切り捨てたがる。そうして切り捨てながら、しかし淡い期待を捨てられずに待っている。そんな自分を嫌悪し、あえて愁いなど微塵も見せぬ顔で、淡い期待を押し隠す。端涯たんがい無き欲望の求めた物とは、何と儂い夢幻だったろうか。

そして私は今夜も、北条にメールを送るだろう。会いたい。自分を満たさぬものを見付けた瞬間に、孤独に陥り、必死で代役を探すのだ。またその代役は、肉としての男でなければならなかった。肉を通して心を垣間見ることのできる男でなければならなかった。友情のような、変わらぬ愛情を互いに持てなければならなかった。北条の存在は、あまりに私を満たし得るものだった。

求められていたつもりが、求めていた。北条がドアを開けた途端にその体にしがみ付き、欲望の塊を押しつけた。次第にその欲望に感化されていった北条は、いつかのように私をベッドに放り投げ、体を覆った。互いに服

をせり取り、ベッドの下へ放り投げる。

……ねえ。打って。前みたいに。私を打って。

……いいよ。

北条はベルトを手に巻き付け、初めはおそろおそろ、次第に恍惚を伴って私の乳房や腹部、腿を打ち付けた。鋭い痛みとともに体中が痺れ、それは快感によく似ていた。

……こんなに腫れて。痛くないの？

……痛いほど心地好いの。求められてるって実感するの。

呼吸は苦痛に歪んで荒く吐かれてばかりいた。息を吸い込む度に傷が染み込んだ。

ベルトを捨て、北条は私の乳房に付いた傷に舌を這わせた。唾液が染み込んでゆく刺激に、一瞬正常が頭を走る。

……私、狂ってる？

……さあな。

……ねえ私、いつから狂ってしまったの？

……狂ってなんかないさ。誰も狂ってなんかない。

……。

……今度、縛ってみる？

……いや。

……どうして。

……怖いわ。

……打たれるのは構わないのに？

……縛られるのは、怖い。身動きのできないまま放つて置かれて、追い掛けることもできずに一人ぼっちにされるような気がするの。

ははは、と北条は笑い、私もそれに便乗してやり過ぎず。北条が電気を消すと、闇はふいに私を襲った。しがみ付くように北条の体温を求めると、甘えんぼうだな、と笑つて北条が私の頭を撫でた。佑介の顔が頭を過つた。同じセリフで私を撫でたことを思い出す。涙が滲みそうになつて北条の胸に顔を埋めた。

寝物語で母の話になつた。暗闇が私に解放感を与えたのか、母の愛を得ようと手首を切つた話までしてしまつた。両親はあまり愛情をあからさまに見せるようなことはなく、一人っ子の私にも無関心を装ひ続けた。その仮面を壊してやろうと、手首を切つてみせたのだった。その策略は失敗に終わった。あの時の母の眼。化物を見るように怯えた母の眼。どれだけ血を流しても、何も変えることはできなかった。

それでも、親がいるだけ幸せだと北条はいつになく神妙な顔をする。施設育ちの北条は他人を両親と呼んで過

ごすことの哀痛を語つた。

……あげるよ。

……え？

……お母さんあげるよ。

……。

北条は沈黙を破るように私の額を弾いた。

「和泉の悪い癖。そうやっていつも、もういらないつて言いながら、待つてるんだもん、切り捨てられて相手が焦つて追ってくるのを待つてるんだろ。そういう情熱が本当の愛情だと信じてるんだろ。」

「わかつてるの。自分でも。わかつてるのよ。だけど、相手にとつて必要な存在でありたいって思うこと、誰にでもあるでしょう？」

そうだな、と北条は今度は優しく頬を撫でた。

先に眠つた北条の寝息を聞きながら、闇に取り残される怖懼に襲われ、必死に眠ろうとした。北条の腕に唇を当てると、その体温が一瞬間を満たした。

静香を見ていると、つくづく自分が病的に思える。静香はあまりに自分と対照的な、健全な女だった。知らぬ間にそういう健全な女ばかりを友人に持つようになっていた。そうした女は女同士にありがちな嫉妬心も持ち合

せておらず、競争も僻みも無縁の世界で会話することができた。

静香の世界で、生きたいと願うこともあった。静香にあえて感化されたいと思った。成績も良く、家庭教師のアルバイトにも情熱を注いでいる。恋愛を夢見ながら、小説や漫画の中の主人公らを愛している。恋愛を通り越して憧憬へと戻りたがっている自分を顧みて、一体何が普通で、何がそうでないのかと自問した。

授業後、久しぶりに静香と出掛け、お茶をしながら会話する。男との卑猥な会話に慣れてしまった私は、ついつい話を卑猥な方へ持っていくようになってしまふ。静香は案外そういう話を好み、物珍しそうに身を乗り出し、私は私で調子に乗ってしたり顔で語り続ける。そうこうするうちに、知らぬ間に時間は過ぎていくのだった。

静香と分けられると、アルバイトへ向かう用意をした。マスカラとアイライナーに埋もれた人形のような眼。赤い唇。小豆色のワンピース。全てが偽贗の象徴に思えた。そしてそれを愛した。偽りの愛情には、偽りの外観がよく似合う。

マイさんと二人で、福井というママの十数年来の知り合いの男に付いた。平日にしては珍しく客の入る日で、

仕舞いには私が一人で福井の相手をする事になった。

「セックスするのは、過程にすぎないんだよ。」と福井は語り出した。

「セックスは相手との距離を縮めるために最も有効な手段なんだよ。曝け出す事で相手と理解し合えるんだ。」だからセックスをしよう、と福井は気味の悪い笑みを浮かべた。同伴っていうの？ 夕飯食べて、お店に付き合っただけでもない。いくらバックが付くんだろう？ そう言っただけの手を取り、醜穢な顔を近づけた。その顔の奥に見た肉への欲望に嫌悪が走り、反射的に手を払った。うまいタイミングでママが顔を割り込ませ、そろそろ時間よと私を促した。俺も出るよ、ママ。福井が立ち上がるのを見て、ママは私の耳元で、さあ、急いで、店を出たら走るのよと囁いた。声に出さずに頷くと、鞆を掴んで店を出た。店ではママがうまく福井を足止めしているはずだった。

私もハイエナなら、道行く男共もまた、ハイエナだ。ナンパやら怪しげな店のスカウトやらを振り切りながら、俄に込み上げる優越を噛み締めた。佑介の埋めることができなかった私の孤独が、他の何ものかで満たされてゆくのは、選ばれなかった者の定めなのかもしれない。

最寄り駅で降りると、背高轍草が生え揃っているのに



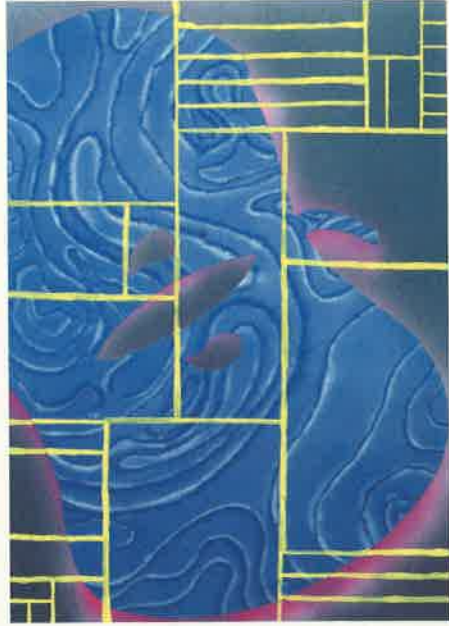
気付いた。いつだったか静香と電車に乗った時に、教えられた名前を今だに覚えていた。線路沿いによく見かけるから轍草っていうのかしらなどと話すうちに、轍草に親近感を抱くようになった。

一本折り取ると、思い立って線路に投げ入れた。電車の迫る音が響いた。

……あなたにも、分けてあげるわ。苦痛と快樂とを。

心の中で呟くと、間もなくして電車が通り過ぎていった。恍惚が体中を駆け巡る。暗闇に目を凝らすと、無傷のまま線路の間に嵌まり込んだ轍草がこちらを見てほくそ笑んでいた。

見覚えのある人影が、アパートの前に座り込んでいた。「北条さん？」



声を掛けると北条は弱々しく顔を上げた。

「どうしたの？ そんなところで。さあ、入って。ずっと待ってたの？」

「最近お呼びがないから、淋しくて来ちゃったんじゃないか。」

「馬鹿ねえ、いくらでも来てくれて構わないのに。そんなに淋しいなら彼女でも作れば？」

「駄目なんだよ、俺。」

北条は部屋に入ると、ベッドにドカリと崩れた。

「駄目って？」

「付き合うと、駄目になるんだよ。」

「どういうこと？」

北条はそれには答えず、黙れと言わんばかりに荒々しく私の唇を塞いだ。その舌の感触に欲情したのか、北条は夢中で私の服を剥ぎ取った。体中に残るミミズ腫れの痕を見て、ひどく残ったな、と指でなぞった。

……まだ痛むの？

……ううん。それより、ねえ、また打つてよ。

北条のベルトを外し、手渡した。

……わかった。その代わり、思い切り声を上げるんだぞ。打つ度に、大きく喘げよ。

……可笑しな注文。

言われた通り、北条がベルトを振り下ろすのと同時に体を震わせ、喘いだ。

……もつとか？ もっと打ってほしいか？

……もつと。

……じゃあそう言え。お願いしますって言うんだよ。

……お願いします……。

北条の顔に恍惚と優越の交錯した表情が浮き彫りにされ、それに触発されて私もまた欲情した。腫れ上がったミミズ腫れを指でぎゅうと掴まれ、痛みが体を刺した。

ああ、と上げる声はもはや喘ぎ声ではなく悲鳴だった。それでもこの苦痛は、快樂なのだ、快樂なのだ、求められることの快樂なのだ、心の中でそう叫び、そして私はまた、狂う。

ふいに北条は私の手をベルトで縛った。

……何するの？

……縛ってやる。

……嫌よ、やめて。縛られるのは、怖いよ。お願い、やめて。

……嫌か。そうか。なら、もつと縛ってやる。

北条がネクタイで足を縛った。

……やめて！ 怖いよ、お願い、ねえ、やめてっただら！

……放つていかれるのが怖いだったな。ほらもつと、叫んでみる。怖いんだろう？

……やめてっただら！！ 解いて！ お願いよ！

北条はさらにシャツで私の目を覆った。暗闇が襲い掛かり、恐怖に意識が朦朧とした。

……叫んでみる、ほら、かわいい声で叫ぶんだ。

……放して！ 解いて！ お願い、お願いよ！！

……俺は部屋を出るからな。一人でそうして叫ぶんだ。言い残して、北条は部屋の扉を閉めた。

……やめてー！ ねえ、置いていかないで！ 放してよ、お願い！

北条が部屋の外でほくそ笑みながら狂女の悲鳴を聞いている気配を感じた。その気配に絶るすがように、誘うように、必死に北条を求めていた。もはや言葉にならない悲鳴だった。

……暗いか？ 怖いか？ 俺もそうだった。気付けばいつも一人で、泣いていたんだ！

……私には関係ない！ ねえ、解いて、これを解いて！ いくらでも好きにしていいいから、一人にしないで！！

私が叫んでいるのか、私の意識だけが口から声を上げるのか、もうわからなかった。

……解いて、北条さん！ そこにいるんでしょ？

お願い……お願いよ……怖いよ、わかるでしょう？

……お願い……お願い……助けて……助けてよ……これを解いて……ああ、暗いわ……暗い……とつても暗い

……せめて目隠しだけでもいいの……ねえ、解いて

……！！ 解い……解け……解けて言っただら！

……おい、放せ！ ……殺すぞ……さつさと解かないと殺すぞ……お前……死にたくなかったらさつさと解け！！

……一生恨んでやるからな！ ……殺してやる！！ ……

殺してやる!! ……殺してやる!!

部屋の中の狂女の声が、次第に低く、別人に変わってゆく様にさすがに恐怖を覚えた北条は、おそるおそる部屋扉を引いた。

……おい、何もそこまで言わなくても……。

北条の悲鳴が響いた。ベッドに横たわる女の鼻から口から、陰から、血とも体液ともつかぬどろどろの黒っぽい液体が溢れだしていた。時折虫のような塊が混じり、どろどろといつまでも溢れ続ける。

……和泉!

北条の声に我に返り、ようやく正気を取り戻していった。目隠しを外されると、光が目を刺し、自分の体の異変に気付く。溢れ出すどろどろの液体に触れると、言葉にならぬ悲鳴が頭の中を反響した。

……これは何? ……血液なの?

……。

北条は慌ただしく服を着替えると、ドアの前で一瞬振り返り、そのまま出ていった。

……待つて、行かないで!

取り残されたまま動けずに横たわる私の体から、さらに溢れ出す液体を見つめ、そうか、これは虚無の塊なのだと悟った。あるいは孤独が、あるいは哀怨が、形とな

ってその姿を見せ付けたのだ。視界が真っ白に曇り、滲み出すのを拭いもせず、一体何が普通で、何がそうでないのかと自問し続けた。全てが虚無なのだ、それを押し隠せるか隠せないか、きつと、それだけのことなのだ。どろどろの液体の中に蠢く虫たちが嗤った。

終

※モノフォビア……孤独恐怖症。

(はやしだ ふくみ・文四年生)



書評が

かわったよ。

編集後記

◇美術部白鷺会に今回の表紙制作をお願いした。それぞれ出来上がったものを編集部側で選ぶことになったが、どの絵を選ぶのが良いのか迷った。最終的には加納さんの絵を表紙に使わせてもらうことにして、井須さんのものを『書評』の広告として、金子さんと荒川さんの絵を雑誌の中のレイアウトに採用させてもらうことになった。四人の方に心から感謝します。

表紙の加納良教さんの絵は、コミカルで親しみやすく、「できるだけ多くの手にとってもらいたい」という編集部側の意向に合ったものだと思う。老紳士の周りの時計は、〈教養〉の変遷してきた時代を表しているとのこと。穴の中からこちら側を覗いている人物の構図もおもしろい。ちなみに、この絵は、制作者が画材を買いに行くため電車に乗っていたとき、ちょうど向い側に坐っていたお爺さんを見て、着想を得たそう。原画に漂う魅力から推し量って、なかなかの

男前だったのかもしれない。

広告に使わせてもらった井須さんの絵は、シンプルで瑞々しく表してくれたデザインである。少しでも多くの人に読まれ、多くの人が参加できる雑誌にしていきたい。

金子さんのレイアウトは、言葉を使つてデザインし、特集の内容に踏み込んだもの。崩れてゆく言葉のなかで、「黒い線が崩壊のなかで生き残ったものであり、後の方向性であるかもしれない」と、製作者は語っている。その黒い線こそが、「文化」や「伝統」ということなのだろうか。

荒川さんの絵のモチーフになっているものは、林檎である。聖書では、林檎は「知恵の実」を意味するらしい。画紙をいっぱいに使った、迫り来るような構図は、不思議な魅力がある。幻想的な青い林檎は特殊な技法を用いて描いてあり、それには霧吹きのような道具を使うのだそう。私はよく知らないのだが、ずいぶん高価な道具だそう。荒川さんがその道具を購入したと言うと、加納さんは魂消していた。

◇今回は小説「モノフォビア」を載せさせてもらった。作品のなかのエピソードで、主人公が北条に母親との関係を語る場面がある。

〈両親はあまり愛情をあからさまに見せるようなことはなく、一人っ子の私にも無関心を装いつ続けた。その仮面を壊してやろうと、手首を切ってみせたのだった。(中略)あの時の母の眼。化物を見るように怯えた母の眼。どれだけ血を流しても、何も変えることはできなかった。〉

北条は主人公とは違って、両親のいない環境に育っている。二人の過去の経験が、小説に表れている孤独や、それを埋めるための異常な性行為、作品の後半にある一種の破局につながっている。最近、「ネグレクト」という言葉をよく耳にする。また、携帯電話やインターネットを通じて溢れかえる性的情報は、もはや歯止めが利かないようだ。日本人の性に關する意識も、変化するのが当然だろう。この小説は、そういった現在の社会状況を見据えながら書かれたのだと私は思う。

(半田見宇史)

連載

本のひろがる①① 関大図書館—阿修羅帖—

仲井 徳とく

少し近現代に進んで。大正時代の文化人たちが出版した木版画集を紹介する。

時は第一次世界大戦（一九一四～一九一九）

を経たころ、戦争を時系列により振り返って評価する。当代一流の文化人の戯文に伊東忠太が戯画を添えて問いかける豪華な風刺漫画帖である。

『阿修羅帖』五冊 大正九年 四月～十年 九月（一九二一～二二）発行

杉村廣太郎ほか著 伊東忠太画 国粹出版社 [786/31-1-5]

各冊に百枚の文と画があり、合計五百枚ある。文は、柳田國男、堺利彦、賀川豊彦、土岐善麿、

杉村楚人冠等が書き、画は、伊東忠太一人が五百図全てを書いている。

第一次世界大戦後の生活の向上、芸術の民衆化、大正モダニズムの風潮が色濃く表れている。装訂は豪華な「大和綴」。(写真アルバムによくみられる)

杉村楚人冠そじんかん（一八七二～一九四五）は朝日新聞記者、評論家、随筆家。「明治・大正・昭和にわたる高雅な新聞人」と称せられる。

伊東忠太（一八六七～一九五四）は建築家であって、版画を好くした。美術雑誌『美術新報』、文芸雑誌『国粹』のメンバー。

（神戸女子大学教員・元関西大学図書館員）



伊國戦を土國に宣す
花窩の
からみ

合ひたる
夜明かな

我鬼（芥川龍之介）



世界潮流

血眼に 泡喰うて
脛ふんばった 緊張振り
主義連登の 暑さかな

賀川豊彦

（関大図書館所蔵）

第121号
書評

『書評』 2004年4月 通巻121号

編集・発行 関西大学生生活協同組合『書評』編集委員会
吹田市千里山東3-10-1 TEL:06-6368-7527

頒価 250円